

# 2. 鳥類

## 《概要》

鳥取県からは、迷鳥も含めて約370種の鳥類が記録されている（ただし外来種は除く。亜種を数えると約390種。鳥取県鳥類目録（NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部2014）およびそれ以降に記録されたオウギアイサ、カンムリウミスズメ、スゲヨシキリ、カラムクドリなどを含む：桐原2018, 桐原・土居2020, 桐原・神谷2020, 中前2017）。

県内には標高において中国地方第1の大山、第2の氷ノ山があり、ブナ林など自然性の高い森林が広範囲に残されている。これらが山地性鳥類の重要な生息地となっていることに加え、氷ノ山周辺は積雪量が多いためか、その標高の割には北方系の動植物が多く生息している。留鳥として生息するイヌワシはその代表例であり、他にもクロジ、コルリ、ルリビタキ、メボソムシクイといった他地域ではおもに亜高山帯で繁殖する種類が、近年での明確な繁殖確認例を欠いてはいるものの、少なからず繁殖していると考えられている。

水辺における生息環境については、日本海の乏しい干満差と、概して距離が短く豊富な水量を保ったまま海岸まで一気に流れ込む河川地形のため、県内では干潟の発達が悪いことがあげられる。そのため干潟を春秋の渡りの中継地として利用する各種のシギ、チドリ類の観察例は少ない。いっぽう、中海や東郷池、湖山池などの大きな内海面、湖面は、ハクチョウ類（おもにコハクチョウ）や各種のカモ類、カイツブリ類の一大越冬地となっている。

今回のレッドリストでは82種の鳥類が掲載該当として取り上げられた（前回は75種）。内訳（括弧内は前回）は絶滅1(2)、絶滅危惧Ⅰ類21(15)、絶滅危惧Ⅱ類17(15)、準絶滅危惧38(40)、情報不足5(3)である。

絶滅として選定されたのはタンチョウ1種である。本種は県内では迷鳥としてのまれな記録があるが、1) 県内の縄文遺跡から本種の骨が出土していること、2) 近世まではふつうに見られた種と推測されること、3) 今日では繁殖の可能性や、定期的な越冬地として本県を利用する見込みがないことを考慮し、「絶滅」該当と判断された。なお前回のリストでは同様の理由でコウノトリも絶滅として掲載されていたが、本種は兵庫県立コウノトリの郷公園を主体とした国内での繁殖・放鳥活動により、近年では県内でも継続的な繁殖の事例がみられるようになったため、「絶滅危惧Ⅰ類」にランク変更された。

鳥類のリスト選定種全体では県内で繁殖する（またはその可能性がある）ものが49種（60%）、越冬地もしくは渡りの中継地としてのみ利用していると考えられるものが32種（40%）である（比率計算の分母に絶滅ランクのタンチョウは除外）。とくに県内で繁殖する種類に対して注

意を払う必要があることは言うまでもないが、本県を越冬地として利用しているだけのものでも、全国的あるいは世界的に絶滅のおそれの高い種（たとえば、クロツラヘラサギ、オオワシ、オジロワシなど）の保護は大切であり、本県のレッドリストでも高ランクに評価された。

絶滅危惧Ⅰ類に挙げられた21種のうち県内で繁殖する（または繁殖可能性がある）のは、コウノトリ、ミゾゴイ、サシバ、イヌワシ、クマタカ、オオジシギ、コアジサシ、ブッポウソウ、ヤイロチョウ、チゴモズ、カヤクグリ、メボソムシクイ、ホオアカの13種である。なかでも、イヌワシは最も絶滅が危惧され細心の注意が必要である。

生態系における食物網の頂点に位置する猛禽類は、もともと個体数が少なく、多くの種がレッドリストに高ランクの危険度で選定されている。栄養段階が高位の動物には、体外に排出されにくい農薬（DDTなど）、有機塩素系物質（ダイオキシンなど）、水銀や鉛などの有害重金属が高濃度で蓄積されるという現象（生物濃縮といわれる）があり、とくに海洋や沿岸域に生息する猛禽類（オオワシやオジロワシなど）では重大な死亡要因となっている。本県で生息が確認されている（迷鳥を除く）タカ目15種のうち13種（87%）、フクロウ目6種のうち5種（83%）、ハヤブサ目4種のうち3種（75%）が今回の県版リストでも選定され、これらをあわせて鳥類のリスト掲載種全体の26%を占める。

フクロウ、アオバズク、コノハズクなどフクロウ科の鳥類、オオアカゲラなどキツツキ科の鳥類、アカショウビン、ゴジュウカラ、ブッポウソウ、オシドリなどは、樹洞を伴うような大木の存在する自然林の減少が希少化の要因の一つとなっている。ブッポウソウは、かつて営巣に利用された木製電柱がコンクリート製電柱に置換されることで営巣適地が減少していた。鳥取県の特定希少野生動植物に指定されるとともに、日本野鳥の会鳥取県支部を中心とした巣箱かけなどの保護活動がなされており、とくに県西部において繁殖確認数が増えてきていることは喜ばしい。

近年、甲虫類のカシノナガキクイムシが媒介する菌類（ナラ菌）によるカシ・ナラ類の集団枯死（ナラ枯れ）の被害が拡大している。これにより山地広葉樹林でくらす種類にとっては生息場所の減少・悪化につながる恐れがある。またカシ・ナラ類の堅果（ドングリ）を主食とするオシドリへの影響も懸念される。

里山や農耕地あるいは社寺林など、営巣場所や餌となる小動物が豊かに存在した伝統的な農村環境の変化が希少化の要因となっていると考えられるものもある。サシバ、コミズク、フクロウなどがそうである。

河川や湖沼などに生息する水鳥については、希少化の要因として生息地の減少や改変があげられる。コハクチョウやマガンの類の生息には、落ち穂や水田雑草を採食する場所として広大な水田地帯の存在が欠かせない。チュウサギのように水辺の昆虫や小動物を捕食する種も、水田に強く依存している。これらの種は水田の宅地化や圃場整備、営農方法の変化などといった環境改変に大きく影響を受けているとみられる。サンカノゴイ、ヨシゴイ、セッカ、チュウヒ、ハイイロチュウヒなどは、水辺のヨシ原の減少が直接的な希少化の要因となっている。コアジサシのように、河口の河川敷につくられる営巣地への人の立ち入りなどにより繁殖数が著しく減少した種もみられる。また今回のリストでは、ゴイサギおよびコサギが新たに追加された。これらは近年までは身近な普通種と見なされていたが、この数年で観察例がかなり少なくなっており、原因の究明とともに保全対策が急がれる。

海岸部や海洋上でくらす種類においては、海洋プラスチックによる環境汚染が深刻な問題となっている。海面や海中を漂う、あるいは岸に流れ着いたプラスチックごみが野鳥の体に絡まったり、野鳥がごみを誤食してしまったりする事例が後を絶たない。誤食により消化管を詰まらせたり傷つけたりすることに加え、プラスチック由来の化学物質やプラスチックに吸着した汚染物質による健康被害の可能性も指摘されている。さらに、環境中で破断され微小な粒状になったプラスチック（マイクロプラスチック）が甲殻類等の小動物の体内に取り込まれ、そういった小動物を野鳥が捕食することで野鳥体内に汚染物質が蓄積していく被害も懸念される。こういったプラスチック類の環境中での動態や野生生物への影響を明らかにしていくとともに、プラスチックごみの排出を減らすよう我々の生活様式の見直しも強く求められる。

脱炭素社会の推進が叫ばれる中、太陽光発電や風力発電といった再生可能エネルギーへの取り組みが進められている。しかしその施設建設が野鳥をはじめとする野生生物に深刻な悪影響を与えている事態は無視できない。太陽光発電施設の多くでは、広大な土地に大量の発電パネルを設置するメガソーラー発電と呼ばれる方式がとられるが、この施設は山林や草原を伐開して建設されることが少なくない。そのため草原性の野鳥や草原にすむ動物を捕食する猛禽類にとって、生息地や採餌場所が失われる事態となっている。風力発電においては、とくに大型猛禽類による発電用風車への衝突事故や、施設建設による繁殖阻害などが大きな問題となっている。風車の建設対象地として、しばしば山地稜線上や海岸部周辺が選定されるが、これらの立地は様々な猛禽類の繁殖地や行動圏域であったり、各種鳥類における渡りの中継地であったりすることが多い。県外では、オジロワシやオオワシの風車への衝突事故が多数報告されており、また風車建設の影響でクマタカが繁殖放棄したとみられる事例もある。本県でも、とくにイヌワシとクマタカの生息地とその周辺での風車建設計画に対して厳重に注意を払う必要がある。

その他、今回のリストでは対象外であるが、スズメの個体数が全国的に減少している。また県東部では、ツバメの

集団ねぐらとしての主要な場所のひとつが道路工事により失われた。これらの種は現時点では直ちに絶滅が危ぶまれるものではないが、こういった普通種の変化についても注意を払っておきたい。

今回は前回よりも8種増えて82種が掲載種となり原稿執筆の負担は前回よりも増大したが、日本野鳥の会鳥取県支部の会員を中心に多くの方に分担いただき原稿をそろえることができた。写真を撮られる方も以前より増加し、今回、ほとんど全部の写真を県内撮影のもので揃えられたことは嬉しいかぎりである。リスト選定、執筆、写真提供にご協力くださったみなさんに厚く御礼申し上げる。

(一澤 圭・鶴崎展巨)

#### ■引用文献

- 桐原佳介 (2018) 鳥取県米子市におけるカラムクドリの山陰地方初記録. ホシザキグリーン財団研究報告, 21: 245-246.
- 桐原佳介・土居克夫 (2020) 鳥取県米子市におけるスゲヨシキリの標識記録. 日本鳥類標識協会誌, 32: 36-41.
- 桐原佳介・神谷 要 (2020) 鳥取県大山町におけるオウギアイサの本州初記録. 日本鳥学会誌, 69: 115-117.
- NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部 (2014) 鳥取県鳥類目録. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部, 58 pp.
- 中前雄一郎 (2017) 東郷池周辺 お散歩ガイド. 自然編野鳥の部. 東郷湖・天神川サケの飼育放流プロジェクト, 23 pp.



**マガン** カモ目カモ科  
*Anser albifrons* (Scopoli, 1769)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



米子水鳥公園 2017.1.22 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団（桐原佳介）

- 選定理由**：県内では米子水鳥公園をめぐらとする個体群が半減した。増加傾向にあるが、その飛来地は限られている。
- 特徴**：全長 65–85 cm ほど。嘴の基部は白く、腹部に黒い帯がみられる。冬鳥として県内の湖沼や池に飛来し数百羽の大きな群れで行動する。
- 分布** 県内：定期的な飛来地として、鳥取市日光と、米子水鳥公園をめぐらとする群れがいる。県外：新旧両北区のツンドラ地帯で繁殖し、ヨーロッパ、カスピ海、中国、韓国、日本、アメリカ、メキシコなどで越冬する。
- 保護上の留意点**：警戒心が強く、圃場整備・宅地化・公共施設の設置によって生育地が失われている。また、採食地の水田では、道路によって分断されない 400 m 四方以上の水田が必要とされている。米子水鳥公園では、マガンのねぐらの保全のために草刈りや水位調整を行っている。飛来数の維持には、ねぐらと採食環境である水田の環境維持が必要である。
- 文献**：17, 18.

執筆者：神谷 要

**ヒシクイ** カモ目カモ科  
*Anser fabalis* (Latham, 1787)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：絶滅危惧II類 (VU)



北栄町 2020.1.7 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：飛来数が少なく、確認地がごく限られている。
- 特徴**：全長 90 cm 内外。嘴が黒く先端寄りにオレンジ色の斑があり、全身がこげ茶色で背中羽毛の縁が淡褐色で縞模様になっている。下腹から下尾筒が白く、脚はオレンジ色。県内では 1 羽から数十羽の群れで見られることが多く、マガンの群れと同行することもある。マガンよりも低い声で「ガハーッ」などと鳴く。警戒心が強い。夜間は川の中洲や湖の浅瀬を峙とし、日中は水田地帯などに移動して採食する。
- 分布** 県内：岩美町、鳥取市日光、湯梨浜町東郷池、倉吉市、北栄町、南部町、米子市米子水鳥公園などで確認されており、日光と米子水鳥公園には毎年少数が飛来している。東郷池では越冬記録がある。県外：本州以北に冬鳥として局地的に飛来する。海外ではユーラシア大陸北部で繁殖し、ヨーロッパ中部・南部、中央アジア、韓国、中国東部で越冬する。
- 保護上の留意点**：峙となる湛水田や池、湖などと、採食地となる広大な水田地帯の隣接が重要。また、採食地や峙に人が近づかないようにすること。
- 特記事項**：国指定天然記念物。
- 文献**：55, 66, 72, 73, 81.

執筆者：桐原佳介

**オオハクチョウ** カモ目カモ科  
*Cygnus cygnus* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：—



米子水鳥公園 2017.11.5 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団（桐原佳介）

- 選定理由**：生息域となる湖沼の環境悪化によって飛来が可能な水域が減少している。
- 特徴**：全長 140–165 cm。コハクチョウより大型でくびと嘴が長い。日本には冬鳥として飛来し、河川河口、開けた池、山間の池などに生息する。越冬地は、コハクチョウより北よりで県内への飛来は少ない。コハクチョウに比べてやや狭い水域にも飛来する。コハクチョウ同様に水田で水生植物を採食することもある。
- 分布** 県内：水尻池、天神川河口、米子水鳥公園など。県外：東北・北海道が主要越冬地。アイスランドからロシアのタイガ地帯の湖沼で繁殖。
- 保護上の留意点**：2011 年頃から全国的に給餌をやめる飛来地が増えており、飛来地の変化がみられる。東北・北海道太平洋側飛来数が多く、鳥取は越冬地の中心ではないが、近年 20 羽程度の群れがみられるようになっている。
- 文献**：21.

執筆者：神谷 要

## コハクチョウ カモ目カモ科

*Cygnus columbianus* (Ord, 1815)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



南部町 2018.12.3 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：中海周辺は西日本最大の越冬地。現在は飛来数が多く安定しているが、水田や河川の変化で生息環境が急速に悪化する恐れがある。

■**特徴**：全長およそ 120 cm。嘴の基部は黄色く先端寄りには黒い。全身白色で首が長く、脚は黒い。幼鳥は嘴がピンク色を帯び、全身が灰色。数十羽から数百羽の群れで家族ごとに行動する。大きな声で「コオー」などと鳴く。冬鳥として飛来し、湖や池、水田地帯に生息する。夜間は人が近づけない川の中洲や池の浅瀬、湛水田などを罫とし、日中は水田地帯に移動して草や稲の落ち穂などを食べる。

■**分布** 県内：鳥取市千代川、鳥取市日光の湛水田、倉吉市天神川、南部町北東部の水田地帯、米子市日野川と米子水鳥公園がおもな飛来地。県外：冬鳥として本州以北に飛来；ユーラシア大陸からアメリカ大陸にかけてのツンドラ地帯で繁殖し、それぞれの中緯度地域で越冬する。

■**保護上の留意点**：罫となる浅くて広い湿地環境と、採食地となる広大な水田地帯が近距離に位置することが重要。冬季湛水田は罫の分散を図るうえで有効。稲作の振興も本種の生息に重要である。

■**文献**：28, 55, 63, 76, 83.

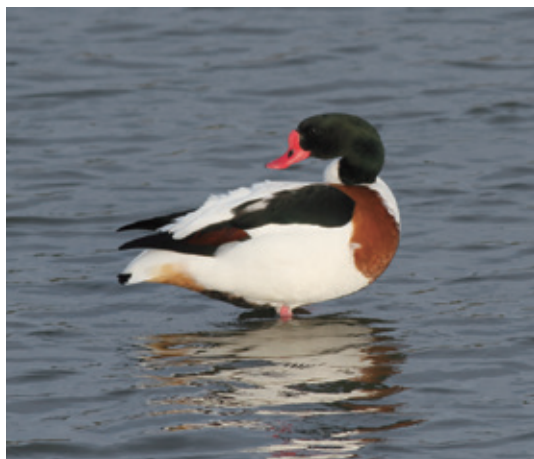
執筆：桐原佳介

## ツクシガモ カモ目カモ科

*Tadorna tadorna* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



米子水鳥公園 2016.3.17 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団（桐原佳介）

■**選定理由**：おもに干潟を生息地とするが、鳥取県ではそのような環境は少ない。そのため、干拓途中の湿地や、休耕田など干潟状の環境になっている場所に飛来していることが観察されることがある。しかし、このような環境は安定的に持続しないのでその飛来の維持が心配される。

■**特徴**：全長 60 cm 前後の緑色の頭部に赤い嘴が非常に美しいカモで、花ガモの別称もある。まれな冬鳥として、県内の河口域・干拓地・米子水鳥公園などに飛来する。干潟や河口域を生息地として、底生生物を食べる。

■**分布** 県内：米子水鳥公園では毎年 10 羽程度が確認される。県外：日本には、西日本を中心として局地的に飛来。スカンジナビア半島、カスピ海からモンゴル、中国北部で繁殖する。南ヨーロッパ、インド、中国、朝鮮半島、台湾で越冬する。

■**保護上の留意点**：河口域の河川改修や干拓工事によって、その生息地の多くが失われている。干潟の自然再生などの生息地の自然再生が重要な課題である。

執筆：神谷 要

## オシドリ カモ目カモ科

*Aix galericulata* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：情報不足 (DD)



天神川河口 2021.10.23 / 撮影：吉田 亮

■**選定理由**：営巣に適する樹洞のある広葉樹が減少している。近年はカシノナガキクイムシ媒介のナラ菌によるカシ・ナラ類の集団枯死（ナラ枯れ）が拡大し、秋冬にオシドリが主食とするドングリの生産量も減少している。

■**特徴**：全長約 45 cm。淡水性のカモ。オスの繁殖期の羽はとくに派手な色彩で目立ち、三列風切の大きな三角形の飾り羽は銀杏羽（いちようばね）と呼ばれる。メスは灰色の地味な色合い。オスのエクリップスはメスと同色だが、オスはクチバシが赤い。おもに冬鳥として渡来し山間地の薄暗い水辺に集団で生息する。渡りの時期には平地の水辺でも見られる。

■**分布** 県内：山間地の水辺の樹洞で繁殖するが数は少ない。冬期には河川上流部や山間地の湖沼、ダム湖などに生息する。県外：北海道と本州中部以北で繁殖し、本州以南で越冬する；ロシア極東南部から中国。

■**保護上の留意点**：営巣できる樹洞の代わりに巣箱の架設が有効である。越冬期の採餌環境を向上するには、湖沼、河川の周辺にシイ・カシなどを植栽する必要がある。

■**特記事項**：鳥取県の鳥（昭和 39 年指定）。

■**文献**：2, 3, 5, 9, 59.

執筆：津森 宏



**トモエガモ** カモ目カモ科  
*Anas formosa* Georgi, 1775

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)  
環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



農業用の貯水池でヒドリガモの群れに1羽だけ混じっていたオス  
八頭町郡家 2020.1.26 / 撮影：吉田 亮

■**選定理由**：県内の河川や湖沼に冬鳥として飛来するが、近年確認できる個体数が減少傾向にある。

■**特徴**：全長が40 cm程度で、マガモ属 (*Anas*) の中ではコガモに次いで小さい。雄の顔には黄色、濃緑色、黒の特徴的な巴型の模様があり、これが和名の由来となっている。雌は全身が地味な褐色で、嘴の基部に小さな白斑がある。おもに種子など植物性の餌を食べ、ドングリも餌にする。広い水面に出ることもあるが、木陰のある池などで目にする事が多い。小さな群れで行動することが多いが、まれに数十羽の大群を目にする事もある。

■**分布** 県内：各地の水域で確認されるが、年による数の変動が大きく、多い年でも確認できる地点が限定される傾向にある。県外：冬鳥として各地に渡来するが、中国地方から東北地方にかけての日本海側に多い傾向。全国的にも年による渡来数の変動が大きい；ロシアシベリア、カムチャツカで繁殖。冬季は中国東部南部、朝鮮半島など。

■**保護上の留意点**：警戒心の強いカモであり、人影にも敏感に反応する。静かで落ち着ける環境の確保が不可欠である。

■**文献**：1, 21, 63, 105.

執筆者：吉田 亮

**ヨシガモ** カモ目カモ科  
*Anas falcata* Georgi, 1775

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



海面を泳ぐメス（左）とオス 日吉津村  
2017.3.1 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内の越冬数が少ない。

■**特徴**：全長46-54 cm。嘴が黒く、オスの頭部は左右に扁平でナポレオンの帽子のような形をしており、緑色の金属光沢があり、頭頂から後頭にかけては紫色。首から背・脇・腹にかけて白地に黒い鱗模様が密にあり、遠くから見ると灰色に見える。三列風切羽が尾羽の左右に細長く垂れ下がり、下尾筒の左右に三角形の淡黄色斑がある。笛のように「ホーイッ」と鳴く。冬鳥として飛来し、海岸や湖、ため池などに生息する。海藻や水草、水面を漂う植物片などを食べる。

■**分布** 県内：冬鳥として県内各地に飛来し、個体数は少ないが海から山までさまざまな環境で見られる。県外：北海道では少数が繁殖し、冬鳥として全国各地に飛来する。海外ではロシア東部、カムチャツカ半島、サハリンで繁殖し、韓国、中国東部で越冬する。

■**保護上の留意点**：本種が集まっている場所は毎年ほぼ決まっており、その周辺の環境を保全すること。海藻や水草を好んで食べることから、海岸の浅瀬の藻場や水草の豊富な川や池の保全も重要。

■**文献**：29, 55, 67, 76, 82.

執筆者：桐原佳介

**シノリガモ** カモ目カモ科  
*Histrionicus histrionicus* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)  
環境省：絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)



淀江町 2017.1.18 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：冬鳥として渡来するが少ない。

■**特徴**：全長40 cm内外の海ガモ。オス成鳥の上面は濃青色から青黒色で体側面は赤褐色。顔の前部、側頭部、頸部、側胸部などに白斑が入りよく目立つ。メスは灰黒褐色で顔の全面と側頭部に白斑をもつ。少々波が荒くても活発に潜水し、貝類、魚類、甲殻類などを捕食する。

■**分布** 県内：鳥取市白兎海岸、酒津などの岩礁海岸、消波ブロック、離岸堤などのある鳥取市賀露、米子市皆生の海岸や、漁港など。まれに大きな河川の中流域で見られることもある。県外：おもに関東・中部以北の岩礁海岸で越冬。北海道や、東北地方の溪流で少数が繁殖。ユーラシア大陸東部・北アメリカ大陸高緯度地方などで繁殖、そのやや南方域で越冬。

■**保護上の留意点**：浅い岩礁海岸で採餌する習性から、岩礁のある海岸線の維持。釣り人が投棄した釣り具（ルアー、釣り針、テグス）の絡まり事故などがあり、釣り人のマナー向上が求められる。

■**特記事項**：東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群は、環境省レッドリストで絶滅の恐れのある地域個体群 (LP) に指定されている。

■**文献**：4, 6.

執筆者：岡垣大志

## ホオジロガモ カモ目カモ科

*Bucephala clangula* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



安来市荒島町 2018.3.11 / 撮影：吉田 亮

■選定理由：県内で越冬するが個体数は少ない。

■特徴：雄の頭部と背部の色は緑がかった黒色，体上面は白色。雄の頭の形は三角形に近く，嘴基部の白斑が目立つ。雌は頭部が暗褐色，体上面は灰褐色で，頭部は雄ほどにはとがってはいない。雌雄とも虹彩は黄色。おもに甲殻類，貝類，小型の魚，水草などを捕食する。県内では群れをつくるほどの数でまとまって見られることはまれで，他の種類の潜水ガモの群れに混じって一羽ないし二羽で潜水採餌していることが多い。つねに水上にいて，陸に上がることはめったに見られない。

■分布 県内：湖山池，東郷池，中海などの広い湖沼。千代川，天神川，日野川などの大きな河川。県外：冬鳥として九州以北に飛来し，沿岸，内湾，河口，湖沼で越冬する。ユーラシア大陸の亜寒帯域で繁殖し，おもに温帯域で越冬する。

■保護上の留意点：漁網や，水中に残された釣糸によって被害を受ける恐れがある。

執筆：下田康生

## ミコアイサ カモ目カモ科

*Mergellus albellus* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



つがいで行動していた2羽のうちのオス 鳥取市水尻池 2016.2.28 / 撮影：吉田 亮

■選定理由：県内全域の河川や湖沼に冬鳥として飛来するが，近年確認される数が減少しつつある。

■特徴：全長が40 cm程度で，アイサ類の中では最も小さい。雄は目の周囲と後頭が黒く，胸側と背面にも明瞭な黒線があるが，その他のほとんどの羽色が白いため，遠くの水面にいてもよく目立つ。雌は全体が濃灰色で頭上から後頭にかけて茶褐色。頬と首の全部は白い。頻繁に潜水して小魚や水棲小動物を食べる。

■分布 県内：県内全域の水域で確認されるが，数は多くない。比較的広い河川や湖沼に単独あるいは数羽程度の小群でいることが多い。県外：冬鳥として九州以北に渡来するが中部日本以北に多い。北海道では少数が繁殖する；スカンジナビア半島からシベリア，カムチャツカにかけて繁殖，それらの南側のヨーロッパ，中国，韓国などで越冬。

■保護上の留意点：生息する水系の環境を保全し，餌となる魚類などの水棲生物相の多様性を維持する必要がある。

■文献：21, 63, 100, 106.

執筆：吉田 亮

## コウノトリ コウノトリ目コウノトリ科

*Ciconia boyciana* Swinhoe, 1873

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧IA類 (CR)



2019年から鳥取市気高町日光で繁殖しているJ0102 (雌) 鳥取市気高町日光 2018 / 撮影：吉田 亮

■選定理由：1971年に国内繁殖個体群の野生絶滅があり，鳥取県では前回は「絶滅」ランクでの掲載だった。しかし，兵庫県豊岡市での人工増殖，野生復帰事業で鳥取県でも現在限定的ながら継続的繁殖が確認されている。

■特徴：全長110 cm内外，翼開長は200 cm内外におよび風切が黒色のほか体は白色。嘴は黒色でまっすぐ長く，目の周りとお脚の橙赤色が特徴。水田，湖沼，河川などで魚類，両生類，爬虫類，昆虫などを捕食する。

■分布 県内：国内繁殖の個体が県内各地の水田地帯に度々飛来しはじめた。2019年から鳥取市気高町で1ペアが継続して繁殖に成功。県外：シベリア南東部から中国東北部で繁殖し中国南東部で越冬。兵庫県豊岡市の人工増殖個体が2005年から野外放鳥され，国内各地で野外繁殖し総数が250個体を超えた(2021)。まれに，大陸産と思われる足環が装着なしの個体が飛来。

■保護上の留意点：餌となる水生生物が豊富な水田地帯の保全が必要。繁殖に利用できるような巨大な天然木がなく，繁殖は人工巣塔に依存。

■特記事項：文化財保護法：特別天然記念物(1956年)，国内繁殖個体群・野生絶滅(1971年)。

■文献：16.

執筆：鈴木 仁



**ヒメウ** カツオドリ目ウ科  
*Phalacrocorax pelagicus* Pallas, 1811

鳥取県：情報不足 (DD)  
環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)



大山町御来屋 2018.1.2 / 撮影：徳永年彦

■**選定理由**：北日本には多いが県内での生息数は少ない。海洋マイクロプラスチックが増加しており、甲殻類・魚類を採餌し生態系上位にある海鳥への影響が懸念される。

■**特徴**：全長約 70 cm。カワウ、ウミウより体は一回り小さく、クチバシは黒く細い。成鳥では体全体が金属光沢を帯びた黒色で、繁殖期には目の周辺の裸出部が赤くなる。北太平洋の離島や海岸の断崖に集団で繁殖する。北海道の沿岸での繁殖は西太平洋の南限にあたる。冬季には全国の海岸や海上に渡来する。

■**分布** 県内：県内全域の海岸に生息し、岩礁や消波ブロックの付近ではウミウの群れと一緒にいるのが観察される。県外：アメリカ・アラスカ州沿岸域からロシア極東のオホーツク海沿岸、サハリン、千島列島、北海道沿岸および東北地方沿岸に生息する。

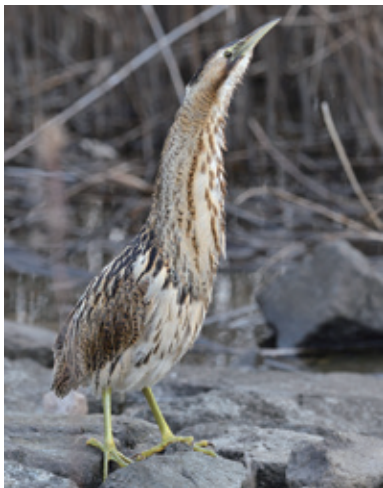
■**保護上の留意点**：海洋マイクロプラスチックの影響は、海鳥だけでなく全ての生物に及ぶものであり、脱プラスチック社会への転換に取り組む必要がある

■**文献**：63, 89, 100.

執筆者：津森 宏

**サンカノゴイ** ペリカン目サギ科  
*Botaurus stellaris* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)  
環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)



島根県出雲市宍道湖 2020.12.22 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内の記録がとてども少なく、確認地もごく限られている。生息環境であるヨシ原の減少が著しく、危機的状況にある。

■**特徴**：全長 70 cm 内外。嘴は太くて長く淡緑黄色で、首も太くて長く、全身が黄褐色で黒い細かなまだら模様が散在している。脚は緑黄色で太くてがっしりしている。広大なヨシ原に生息し、常にヨシ原に潜んでいるため、姿が見られる機会はとてども少ない。首を斜め下に伸ばして水面を覗き込み、浅瀬にいる小動物を捕食する。繁殖期に「ポォー、ポォー」と鳴くが、越冬地では声を聞くことはほとんどない。

■**分布** 県内：鳥取市、米子市、米子水鳥公園で確認されているが、記録がとてども少ない。県外：北海道、茨城県、千葉県、滋賀県で繁殖し、本州以南に冬鳥として飛来する。海外ではユーラシア大陸中央部とサハリンで繁殖し、アフリカとインド北部、中国南部で越冬、地中海沿岸部とカスピ海南部では留鳥。

■**保護上の留意点**：広大なヨシ原に依存するため、広いヨシ原の保全と育成が重要。川のワンドを囲む小規模なヨシ原にも潜むので、川岸植生の保全。

■**文献**：51, 61, 63, 65, 71.

執筆者：桐原佳介

**ヨシゴイ** ペリカン目サギ科  
*Ixobrychus sinensis* (Gmelin, 1789)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



米子水鳥公園 2013.8.2 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団 (桐原佳介)

■**選定理由**：生息地であるヨシ原が減少傾向にあり、個体数の減少が心配される。

■**特徴**：全長 35 cm 前後。山吹色の小型のサギ。夏鳥として、県内の河川敷・湖沼ヨシ原に飛来し、そこで 5-7 月にかけてお椀のような巣を作る。ヨシ原から出てこないため観察されにくい。小魚などをおもな餌とする。

■**分布** 県内：中海周辺のヨシ原、米子水鳥公園、鳥取市湖山池。県外：スリランカ、インド、中国、日本など東アジアを中心に繁殖し、日本では、西南諸島以南で越冬する。

■**保護上の留意点**：河川敷内・湖畔の公園化、護岸工事によるヨシ原の減少により急速に生息地が減少している。また、オオクチバスの侵入したため池の小魚の減少により影響を受けることが予測されている。

■**文献**：91.

執筆者：神谷 要

### ミゾゴイ ペリカン目サギ科

*Gorsachius goisagi* (Temminck, 1836)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



大山町 2019.6.21 / 撮影：徳永年彦

■**選定理由**：日本固有種，日本のみで繁殖する。里山の開発や放棄地の拡大で個体数は減少している。鳥取県内の観察例はごく少数である。

■**特徴**：カラスほどの大きさで，全身が黒褐色だが飛ぶと茶褐色に見えることもある。4-5月に越冬地の東南アジアから渡来し繁殖する。里山や森林の薄暗い場所を好み，ミミズやサワガニ，カエルなどを食する。渡来初期の夜間にポォー，ポォーと低い声でよく鳴くが，昼間によく採食する。

■**分布** 県内：岩美町，鳥取市，大山町，伯耆町。県外：本州以南；冬鳥として台湾，中国南部，フィリピン，モルッカ。

■**保護上の留意点**：県内での個体数や生息環境の調査が必要。薄暗い里山や森林など営巣環境の保護が必要。

執筆：土居克夫

### ゴイサギ ペリカン目サギ科

*Nycticorax nycticorax* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



米子水鳥公園 2020.6.18 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団（桐原佳介）

■**選定理由**：かつては普通種だったが，近年個体数の減少が著しい。

■**特徴**：全長 60 cm 内外。成鳥は嘴は太くて長く黒色で目は赤く，首をいづも縮めておらずぐりとした体形。頭頂から背中にかけて藍色で頭から腹にかけては白く，翼は灰色。後頭部に白くて長い飾り羽が2本ある。幼鳥は嘴が黄色くて全身褐色で白いまだらが散在。脚は黄色で太い。日中は水辺の茂みに潜み，夜間に水辺に移動して浅瀬の小動物を捕食する。「クワッ」と鳴く。留鳥として川や池，田んぼなどの湿地に生息する。

■**分布** 県内：各地に広く分布するが観察記録が少ない。中海の萱島のサギ類の集団コロニーで繁殖しており，米子水鳥公園では夏から秋によく見られる。県外：本州，四国，九州では留鳥だが，一部南下し南西諸島では冬鳥。海外ではユーラシア大陸と北米で繁殖し，アフリカと東南アジアで越冬，ユーラシア大陸南部，アメリカの沿岸部～南アメリカでは留鳥。

■**保護上の留意点**：採食環境である水深の浅い湿地と，ねぐら環境や繁殖環境である水辺の林や笹藪の保全。夜行性のため観察機会が少なく，普通種である印象から注目されず，生息現状が見落とされている可能性がある。

■**文献**：43, 55, 55, 63, 70.

執筆：桐原佳介

### ササゴイ ペリカン目サギ科

*Butorides striata* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



鳥取市 2021.5.31 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：繁殖地・生息地の減少により，個体数の減少が心配される。

■**特徴**：全長 45 cm 程度の灰色の小型のサギで，ゴイサギとは，大きさや目の色などで識別できる。夏鳥として県内の河川敷・湖沼に飛来し，5月から7月に水辺の樹木にお椀状の巣を作る。水辺で小魚・小動物を食べる。

■**分布** 県内：千代川，天神川，日野川など。県外：アムール川，ウスリー川周辺，朝鮮半島，日本，中国などで繁殖し，台湾，フィリピン，ボルネオで越冬する。

■**保護上の留意点**：全国的に 1990 年代から 2010 年代にかけて大きく減少した。河川敷内・河畔の公園化，農村部の水辺の樹木の伐採や土地の改編によって急速に繁殖地が減少した。親水公園の設置や河川敷内での工事には事前に十分な配慮が必要。

■**文献**：100.

執筆：神谷 要



**チュウサギ** ペリカン目サギ科  
*Egretta intermedia* (Wagler, 1829)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



夏羽 境港市 2019.5.27 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：飛来数が少なく、個体数が減少傾向にある。
- 特徴**：全長 70 cm 内外。全身白色で脚全体が黒く、夏羽は嘴が黒く目が赤みを帯び、冬羽は嘴が黄色く目が淡黄色。ダイサギに似るが、嘴と首がより短く体も小さく、口角が目の下で止まる点が異なる。採食には水中よりも草地进行を好む傾向がある。夏鳥として飛来し、水田や草地、池などで昆虫やカエルなどを捕食。他のサギ類と樹上に集団コロニーを形成する。
- 分布** 県内：各地。しかし、本種の県内での繁殖が確認された報告はほとんどなく、繁殖状況は不明。県外：本州、四国、九州に飛来して繁殖し、九州南部と南西諸島で越冬する個体もいる。海外では韓国と中国南部で繁殖し、東南アジアやオーストラリア東部で越冬。アフリカ、インドからジャワ島にかけては留鳥。
- 保護上の留意点**：採食環境である湿地や草地と、繁殖に利用する水辺林や笹藪の保全が重要。主要な生息環境である水田の減少や荒廃は重大な影響がある恐れがある。他のサギ類と混ざってコロニーを形成するので、サギ類のコロニーの苦情対策の際には本種が混じっていないか注意が必要。
- 文献**：26, 55, 69, 75, 88. 執筆者：桐原佳介

**コサギ** ペリカン目サギ科  
*Egretta garzetta* (Linnaeus, 1766)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



婚姻色が表れている夏羽 境港市  
2019.5.27 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：かつては普通種だったが、近年個体数の減少が著しい。
- 特徴**：全長 60 cm 内外。全身白色で嘴は黒く、脚は跗蹠が黒くて趾は黄色。夏羽は後頭に長い冠羽が2本ある。春には婚姻色が表れ、目先と趾が赤みを帯びる。採食環境は水中を好み、片脚で水底を掻き回して獲物を追い出したり、嘴で波紋を立てて小魚を誘引したりして捕食する。留鳥として田んぼや川や湖、池などに生息。集団で竹藪や樹林地に営巣し、他のサギ類とコロニーを形成する。
- 分布** 県内：各地で記録があるが、近年は局所的。本種の県内での繁殖が確認された報告はほとんどなく、繁殖状況は不明。県外：留鳥または夏鳥として本州、四国、九州で繁殖する。北海道ではまれな夏鳥。海外では地中海沿岸部とカスピ海沿岸部、中国南部で繁殖し、アフリカで越冬。インドから東南アジアにかけて、オーストラリア東海岸では留鳥。
- 保護上の留意点**：獲物が生息する水深が浅い湿地と、営巣場所となる水辺の林の保全が重要。他のサギ類と混じってコロニーを形成するので、サギ類のコロニーの苦情対策の際には本種が混じっていないか注意が必要。
- 文献**：55, 71, 76, 76, 82. 執筆者：桐原佳介

**クロサギ** ペリカン目サギ科  
*Egretta sacra* (Gmelin, 1789)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



阿弥陀川河口 2018.12.11 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：県内での確認記録が少なく、生息に適した岩礁海岸の環境が悪化している恐れがある。
- 特徴**：全長約 62 cm。黒色型と白色型とがあるが、九州以北では白色型はごくまれ。嘴は太くて長く、黒褐色や黄褐色など。脚は短めで、黄緑色または緑褐色。岩の多い海岸に留鳥として生息し、魚や甲殻類、貝などを食べる。単独で観察されることが多い。
- 分布** 県内：境港市から岩美町まで、県内海岸線のほぼ西端から東端近くにおよぶが、観察記録の多くは河川河口部や漁港周辺である。ただしこのことは、岩礁海岸の多くがアクセス困難なため観察機会が限られることも関係していると思われる。県外：本州・四国・九州・南西諸島；東南アジアからオセアニア。
- 保護上の留意点**：岩礁海岸および河川河口域について周辺地域も含めた保全が重要。とくにゴミによる汚染や開発行為には十分注意が必要。岩礁海岸での生息状況の調査も進めることが望まれる。
- 文献**：10, 22, 63, 98. 執筆者：一澤 圭

## ヘラサギ ペリカン目トキ科

*Platalea leucorodia* Linnaeus, 1758

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省：情報不足 (DD)



成鳥夏羽 米子水鳥公園 2020.3.21 /  
撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団（桐原佳介）

■選定理由：飛来数が大変少なく、飛来地も限定されている。

■特徴：全長 80 cm 内外。全身白色で、嘴は黒くて長く扁平で、先端は幅広く丸い、脚は長くて黒い。夏羽は後頭に房状の長い冠羽がある。幼鳥は風切羽先端が黒い。歩ける程度の水深の浅瀬を歩き周って、頭を左右に振って嘴で水底を探り、小魚や甲殻類などを捕食する。河口や池などの水深が浅い湿地に生息する。

■分布 県内：各地で記録があるが局所的。米子水鳥公園には毎年数羽が飛来しているが、その他の地域には不定期に現れる。県外：数少ない旅鳥または冬鳥として本州、四国、九州に飛来し、国内の飛来数は数十羽程度といわれる。海外では地中海沿岸部、黒海沿岸部、カザフスタンから東のユーラシア大陸中緯度地域で繁殖し、アフリカ北部と中国南東部で越冬、イランからインドにかけては留鳥。

■保護上の留意点：よく飛来する場所がほぼ決まっているので、その環境の保全。また、本種が利用する浅くて広い湿地環境の保全。

■文献：55, 67, 80, 81, 83.

執筆：桐原佳介

## クロツラヘラサギ ペリカン目トキ科

*Platalea minor* Temminck & Schlegel, 1849

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (EN)



成鳥夏羽 米子市淀江町佐陀川河口 2015.4.8 /  
撮影：桐原佳介

■選定理由：飛来数が大変少なく、飛来地も限定されている。

■特徴：全長 77 cm 内外。全身白色で、嘴は黒くて長く扁平で、先端は幅広く丸い。目の周りは黒い皮膚が裸出している。脚は黒くて長い。夏羽は後頭に房状の長い冠羽があり、胸が黄色味を帯びる。幼鳥は嘴が肉色を帯びており、若鳥は風切羽の先端が黒い。歩ける程度の水深の浅瀬を歩きまわり、頭を左右に振って嘴で水底を探り獲物を捕食する。河口や池などの水深が浅い湿地に生息する。

■分布 県内：鳥取市と北栄町、米子市で記録があるが局所的。米子水鳥公園にはほぼ毎年数羽が飛来しているが、その他の地域には不定期に現れる。県外：数少ない旅鳥または冬鳥として本州、四国、九州に飛来する。海外では朝鮮半島西岸部で繁殖し、中国南東部、台湾、香港、ベトナムなどで越冬。世界的な希少種であるが、近年、個体数は増加傾向にある。

■保護上の留意点：飛来地がほぼ決まっているので、その環境を保全すること。また、本種の生息環境である、浅くて広い湿地の保全も重要。

■特記事項：国内希少野生動物植物種 (2020)。

■文献：27, 53, 55, 62, 87.

執筆：桐原佳介

## タンチョウ ツル目ツル科

*Grus japonensis* (Müller, 1776)

鳥取県：絶滅 (EX)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



北栄町 2019.12.19 /撮影：桐原佳介

■選定理由：現在、国内では北海道東部に留鳥として生息するのみだが、米子市目久美遺跡から橈骨、脛骨などの骨が出土しており、かつて鳥取県に生息していたのは確実である。

■特徴：体高は 140 cm あり、頭部は毛を欠くため赤い。湿原に生息し、ドジョウなどの小魚のほか、バッタなどの昆虫や植物も食べる。北海道東部のタンチョウは留鳥。

■分布 県内：現在は迷鳥としてまれに記録されるのみ。最近では 2007 年 4 月に境港市渡町で若鳥 1 羽、2007 年 11 月に琴浦町逢東で幼鳥 1 羽、2008 年 1 月に米子市八幡で幼鳥 1 羽、2019 年 12 月に北栄町で 1 羽などの記録がある。鳥取藩の本草学者平田眼翁著の「因伯産物薬効録」にはまれに飛来と記されている。県外：中国とロシアにまたがるアムール流域と国後島を含めた北海道で繁殖、冬鳥または迷鳥として朝鮮半島。

■保護上の留意点：鳥取県では繁殖の可能性はないが、飛来したときには静寂を保つなど、十分な配慮を要する。

■特記事項：国の特別天然記念物 (1952 年指定)、「種の保存法」規制対象種。

■文献：15.

執筆：井上貴央



**クイナ** ツル目クイナ科  
*Rallus aquaticus* Linnaeus, 1758

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



米子水鳥公園 2012.4.14 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団（桐原佳介）

■**選定理由**：観察記録がととも少ない。生息環境である植生が豊かな水辺の減少も著しい。

■**特徴**：全長 29 cm 内外。体は茶色で顔から腹にかけて灰色，嘴は赤くて細長く，やや下に曲がる。脚は淡い赤色。腹は黒と白の縞模様。岸辺に草が繁茂する小川や湿地に生息し，昆虫類や魚類，甲殻類など水辺の小動物や植物の種子などを食べる。「クィ，クィ」などと鳴く。警戒心と潜行性が強く，茂みの中からほとんど姿を現さない。

■**分布** 県内：米子水鳥公園では毎年少数が確認されているが，その他の地域は古い記録のみで，近年はほとんど記録がない。県外：北海道と本州北部では夏鳥として繁殖し，本州以南では冬鳥として飛来する。海外ではユーラシア大陸中緯度地域で繁殖し，アフリカ北部や中国南部，東南アジア北部で越冬する。地中海沿岸部の一部では留鳥。

■**保護上の留意点**：河川改修により水辺の植生が失われるのが脅威。植生が豊かな水辺の保全が重要。

■**文献**：31, 54, 58, 60, 76.

執筆者：桐原佳介

**ヨタカ** ヨタカ目ヨタカ科  
*Caprimulgus indicus* Latham, 1790

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥取市国府町 2020.10.9 / 撮影：市原農太郎

■**選定理由**：観察例の減少が顕著である

■**特徴**：夏鳥として4月頃渡来する。昼間は木の枝に腹を密着するように休息しており姿を見つけるのは難しいが，夜間にキョキョキョキョキョと独特な声で鳴き，遠方でも存在を把握しやすい。日没前後より空中を飛翔しながらガなどの飛翔昆虫を捕食する。

■**分布** 県内：1995年以降の確実な記録としては，鳥取市国府町，鳥取市河合谷，八頭町ふるさとの森，倉吉市，琴浦町船上山，大山町大山。県外：南西諸島をのぞく日本全国，東アジアで繁殖し，南アジア・東南アジアで越冬する。

■**保護上の留意点**：草原や灌木が適度に混じる明るい樹林の維持が重要。繁殖状況の確認のための調査も必要。

執筆者：吉田良平

**タゲリ** チドリ目チドリ科  
*Vanellus vanellus* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



米子市淀江町佐陀川河口 2017.1.25 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内で確認される個体数が少ない。

■**特徴**：全長 30 cm 内外。顔と腹は白く，額から頭頂にかけて黒くて後頭部に細長い房状の黒い冠羽が伸びる。胸に黒い帯がある。背中緑色で金属光沢がある。脚は暗赤色で下尾筒は橙色。ミューと猫のような声で鳴く。先が丸い翼でフワフワと飛ぶ。稲刈り後の田んぼや河川敷などに生息する。

■**分布** 県内：冬鳥として各地で記録がある。県外：本州中部以西に冬鳥として飛来する。海外ではユーラシア大陸の中緯度地域で繁殖し，地中海沿岸部と中国南部で越冬。

■**保護上の留意点**：水田がおもな生息環境であるため，水田地帯の保全が重要。稲作の衰退で水田地帯が荒廃すると，本種の生息に重大な影響があると思われる。

■**文献**：43, 55, 78, 79, 86.

執筆者：桐原佳介

## イカルチドリ チドリ目チドリ科

*Charadrius placidus* Gray & Gray, 1863

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



親鳥とヒナ 南部町下中谷 2017.5.16 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内で確認される個体数が少なく、繁殖環境が減っている。  
 ■**特徴**：全長 20 cm 内外。嘴は黒くて細長く、頭頂から翼、背中、尾羽にかけては灰褐色。額は白く、その上に左右の目をつなぐように黒い帯がある。嘴の基部から目の後ろにかけては黒褐色で、目の周りに細い黄色の縁取りがある。喉から後頸にかけて白く、その下側が黒く縁取られている。腹は白く、脚は淡黄色。留鳥として河原や水田、溜池などの湿地に生息し、砂礫地で繁殖する。おもに河川の中流から上流域に生息し、海辺に現れることは少ない。

■**分布** 県内：留鳥として各地で記録がある。県外：北海道では夏鳥、本州と四国で繁殖し、南西諸島では冬鳥として分布する。海外ではロシア南東部から中国東北部にかけての地域で繁殖し、朝鮮半島では留鳥、ミャンマーからベトナム、中国南東部で越冬する。

■**保護上の留意点**：主要な生息環境である砂地の河原の保全。繁殖環境として砂礫地に依存しており、草が生い茂ると繁殖できなくなるので砂礫環境の保全も重要。

■**文献**：43, 53, 54, 68, 88.

執筆：桐原佳介

## オオジシギ チドリ目シギ科

*Gallinago hardwickii* (Gray, 1831)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



米子水鳥公園 2021.8.4 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団 (桐原佳介)

■**選定理由**：県内では標高の高い草原で繁殖していた。現在は記録がないが、少数が繁殖期にも観察されている。生息数は少ない。

■**特徴**：全長 30 cm ほど。くちばしはふとくて長く、全身茶褐色に見える。夏鳥として本州中部以北で繁殖し、餌は昆虫やミズなど。繁殖期にはズービヤク、ズービヤクと鳴きながら飛び、急降下時にはザザザ・・・と尾をふるわせて音を出す。

■**分布** 県内：標高の高い草原で過去に繁殖例があるが、近年はない。渡りの季節には平地の草地でも観察例がある。県外：中部以北の草原で繁殖。その他の地域では局地的。渡りの季節は各地で観察されている。オーストラリアなどで越冬。

■**保護上の留意点**：県内のまとまった草原、とくに標高の高い草原の保護が必要。繁殖個体の保護が必要。

執筆：土居克夫

## タマシギ チドリ目タマシギ科

*Rostratula benghalensis* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



保護された巣立って間もない幼鳥 米子水鳥公園 2006.9.13 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団 (桐原佳介)

■**選定理由**：観察記録が大変少なく、生息数が少ないと思われるが、生息状況が不明。

■**特徴**：全長 25 cm 内外。橙色の嘴は細長く、まっすぐで先端がやや下に曲がる。オスは暗褐色、メスは顔が赤褐色で胸と翼は黒褐色。オスメスともに頭の中央に線があって目の周りに勾玉状の模様があり、腹は白い。翼を広げると水玉模様がある。水田や湿地に生息する。

■**分布** 県内：鳥取市、湯梨浜町、倉吉市、米子市で記録があるが、数例のみ。米子水鳥公園では幼鳥が保護された記録があり、周辺地域で繁殖していた可能性がある。県外：本州中部以南で留鳥として生息する。海外ではアフリカの中部から南部、インド、東南アジア、オーストラリアの東海岸に留鳥として生息。中国東部で繁殖する個体は南に渡って越冬する。

■**保護上の留意点**：水田がおもな生息環境であるため、水田地帯の保全が重要。また、観察記録が乏しいので、生息状況の把握も必要。

■**文献**：32, 43, 50, 55, 63.

執筆：桐原佳介



**ズグロカモメ** チドリ目カモメ科  
*Larus saundersi* (Swinhoe, 1871)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：絶滅危惧II類 (VU)



成鳥夏羽 米子水鳥公園 2019.4.6 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団（桐原佳介）

■**選定理由**：世界的な希少種（推定個体数 9,500）で県内への飛来数も少ない。

■**特徴**：全長 30 cm 前後、嘴の黒い小型のカモメで、ユリカモメと誤同定しやすい。体はユリカモメより一回り小さく、嘴はズグロカモメのほうが黒くて太く、初列風切の様子が識別ポイントとなる。日本には冬鳥として河口・干拓地など開けた海岸・湖岸に飛来するが、九州と西南諸島以外では個体数が非常に少ない。鳥取県にはごく少数が飛来する。カニ類が主食。

■**分布** 県内：湯梨浜町、北栄町、米子市で記録されている。米子水鳥公園での観察例が多い。県外：中国の黄海沿岸や朝鮮半島北部の日本海沿岸などで局地的に繁殖し、日本、台湾、中国南部の海岸で越冬する。

■**保護上の留意点**：カモメ類は釣り人が放棄したテグスなどで損傷することが多い。越冬地であってもこのような人為的要因で個体数を減少させることは避けるべきであり、対策が必要。

■**文献**：101.

執筆者：神谷 要

**ワシカモメ** チドリ目カモメ科  
*Larus glaucescens* Naumann, 1840

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



成鳥夏羽 米子市 2020.3.3 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：冬鳥として鳥取県の海岸に飛来するが個体数は少ない。

■**特徴**：全長 65 cm ほど。セグロカモメより少し大きく、成長の背面はセグロカモメと同じくらいの濃さの青灰色。初列風切の色はセグロカモメ、オオセグロカモメの黒色とは異なり、背面より少し濃い灰色。虹彩はセグロカモメ、オオセグロカモメに比べより暗色で黒っぽく、嘴もより太く見える。

■**分布** 県内：県内各地の漁港を中心とした海岸、河口で観察される。県外：アリューシャン列島、北米北部沿岸で繁殖し、日本では冬鳥としておもに北海道、東北地方に飛来する。

■**保護上の留意点**：港湾整備に伴う採餌環境の悪化が憂慮される。また、釣り人が投棄したゴミや釣り具（ルアー、釣り針、テグス）の誤嚥、絡まり事故なども発生し、釣り人のマナー向上が求められる。

■**文献**：47.

執筆者：岡垣大志

**シロカモメ** チドリ目カモメ科  
*Larus hyperboreus* Gunnerus, 1767

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



成鳥冬羽 日野川河口 2020.3.3 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：冬鳥として鳥取県の海岸に飛来するが個体数は少ない。

■**特徴**：全長 70 cm 内外。日本で見られるカモメ類中最も大きい。成鳥は頭部から腹部にかけて白色。背面は淡い青灰色で、初列風切の先端部は白い。若鳥も他のカモメ類より淡い褐色で、3年目の春にはほぼ全身が白くなる。大型カモメ類の群れ中に混じることが多いが、色の薄さとひととき大きな体が目立つ。

■**分布** 県内：県内各地の河口、港湾部で冬鳥として記録されるが散発的。県外：ユーラシア大陸、北アメリカの北極圏、グリーンランド、アイスランドで繁殖し、日本では冬鳥として北海道、東北地方を中心に、九州以北に飛来するが多くない。

■**保護上の留意点**：港湾整備に伴う採餌環境の悪化が憂慮される。また、釣り人が投棄したゴミや釣り具（ルアー、釣り針、テグス）の誤嚥、絡まり事故なども発生しており、釣り人のマナー向上が求められる。

■**文献**：97.

執筆者：岡垣大志

## コアジサシ チドリ目カモメ科

*Sterna albifrons* Pallas, 1764

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



米子市淀江町 2015.5.13 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：ダムや治水工事で放水量が調整され水面の上昇が抑制され遷移が進行したことで、営巣適地の裸地環境が減少した。また水辺でのレジャーでの人の立ち入りにより、繁殖途中で放棄することもみられる。近年繁殖数が激減し、個体数が減っている。

■**特徴**：白いツバメのような形をしており、海岸や湖沼を飛び回り、水中へダイビングして小魚を捕まえる。

■**分布** 県内：近年、天神川河口と日野川下流域で繁殖実績があるものの不安定である。以前は千代川河口でも繁殖が確認されていたが、近年の繁殖は確認されていない。県外：日本では本州以南で繁殖。ヨーロッパ、アフリカ、アジア、オセアニア、北アメリカ中部から南アメリカ北部で繁殖。冬季は熱帯地域で過ごす。

■**保護上の留意点**：営巣適地の保護および繁殖期における立入制限等の対応が必要である。

■**特記事項**：鳥取県特定希少野生動植物（2002）。

執筆：吉田良平

## ウミスズメ チドリ目ウミスズメ科

*Synthliboramphus antiquus* (Gmelin, 1789)

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧ⅠA類 (CR)

ウトウやミツユビカモメなどの大集団の近くにいた数羽のウミスズメのうちの1羽  
琴浦町沖約15km 2017.1.29 / 撮影：中前雄一郎

■**選定理由**：冬鳥として県下の日本海の沖合に飛来するが、生息数がきわめて少ない。

■**特徴**：全長約25cm。短くて太いピンクの嘴と黒い頭頂部が特徴の潜水性海鳥で、カンムリウミスズメのような冠羽はない。鳥取県では観察できないが夏羽では目の上に白い飾り羽が出る。ずんぐりした体型や、前方に飛び上がり頭から一気に潜る動き、空を飛ぶように素早く水中を泳ぐ姿はペンギンに似る。2羽から6羽程度の小群でよく行動し、潜って小魚や甲殻類などを捕食する。水面近くを一列になり速いピッチで羽を動かして飛ぶ。

■**分布** 県内：県中部の日本海10-20km沖で、冬に観察できる。岸からの観察記録もある。県外：おもにユーラシア大陸から北アメリカ大陸北西部にかけての地域で繁殖。冬に日本各地にも南下するが、きわめて少ない。

■**保護上の留意点**：油や化学物質、プラスチックごみなど海洋汚染につながるものを出さないなど海洋環境の保全が重要。観察場所のほとんどが波の高い冬の日本海沖という過酷な条件であるが、船舶を使った調査観察をしっかりと続けていく必要がある。

■**文献**：49。

執筆：中前雄一郎

## カンムリウミスズメ チドリ目ウミスズメ科

*Synthliboramphus wumizusume* (Temminck, 1836)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

5羽の群れで浮いたり潜ったりしながら採餌していたうちの1羽  
北栄町沖約10km 2020.5.23 / 撮影：中前雄一郎

■**選定理由**：日本海沖で観察できるが生息数が少ない。

■**特徴**：全長約25cm、白い後頭部と黒い冠羽が特徴の潜水性海鳥で、2~6羽の群れで、海面に浮いたり潜ったりしながら小魚や甲殻類などを捕食する。繁殖期以外はほぼ海上で過ごす。鳥取県では10月から5月までの間、沖合で観察できる。ウトウやウミスズメの群れの近くにいることもある。船で近づくとすばやく潜り、しばらくすると遠方で浮上する。「チツ」と小さいがよく響く声で鳴きながら、群れで集まる。体は水をよくはじく。離水する時は羽ばたきながら何歩も海面を助走して飛び立つ。

■**分布** 県内：鳥取県中部の日本海沖5-20kmで観察できる。冬に見られることが多いが5月でも見られることがある。県外：日本列島周辺や朝鮮半島南部。福岡県筑前沖の島、島根県西ノ島町星神島、京都府舞鶴氏沓島、石川県七ツ島、伊豆諸島など日本近海の島嶼で繁殖。

■**保護上の留意点**：汚染につながるものを出さないなど海洋環境の保全が重要。冬季に、船舶での調査観察をしっかりと続けていく必要がある。

■**特記事項**：国の天然記念物。

■**文献**：49, 93。

執筆：中前雄一郎



**ミサゴ** タカ目ミサゴ科  
*Pandion haliaetus* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥取市浜坂海岸 2021.10 / 撮影：小西広視

■**選定理由**：魚食性の猛禽類だが、河川の水量の減少・水質汚濁等により餌となる魚が減少、営巣する大径木も減少しており営巣場所の確保が難しく生存が危惧される。

■**特徴**：雄はハシブトガラスよりやや大きく全長 58 cm、雌はさらに大きく全長 64 cm の猛禽。体の上面は黒褐色だが頭部と下面は白く、飛翔中は白っぽく見える。過眼線と胸には黒褐色の帯が、頭部には短い冠羽がある。翼は細長く尾羽は短い。ホバリング（停翔飛行）して狙いを定めてから水中に急降下して魚を採食する。

■**分布** 県内：主要な湖沼、河川、海岸およびその周辺の山地。県内で繁殖が確認されている。県外：全国の主要な湖沼、河川などの水域とその周辺；ユーラシア、アフリカ、北米、オーストラリア、フィリピン。

■**保護上の留意点**：餌となる魚類が生息できる河川環境整備と営巣可能な大径木の育つ山地の保全が必要。

■**文献**：56, 63, 99, 102.

執筆：戸川信吾

**ハチクマ** タカ目タカ科  
*Pernis ptilorhynchus* (Temminck, 1821)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



米子市淀江町今津 2015.05.13 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：確認例が少なく、個体数が少ないと思われる。

■**特徴**：全長 60 cm 前後、翼開長 120–135 cm 程度でトビと同大。とくにスズメバチの幼虫を好んで食べるのでこの名がある。ハチの攻撃を受けても刺されない。ヘビ、カエルなども捕食する。体の上面は暗褐色だが、下面の羽の色は個体変異が多く白っぽいものから暗褐色まで多様。夏鳥として渡来し、低山の森林で繁殖する。渡来する時期は他のタカ類よりも遅い傾向がある。他のタカ類の古巣を利用することがある。

■**分布** 県内：ほぼ県内全域。県外：九州から北海道；サハリン、ロシア沿海州、シベリア南部などで繁殖。越冬地はインド、マレー半島、インドネシア、フィリピンなど。

■**保護上の留意点**：大山町清水原でオオタカの古巣を利用して繁殖した例があるが、観察例が少なく県内全体での繁殖状況はよくわかっていない。生息環境から近年の低山地の森林開発の影響を受けやすいとみられ、早急な実態調査が必要。

執筆：田中一郎

**オジロワシ** タカ目タカ科  
*Haliaeetus albicilla* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)  
環境省：絶滅危惧II類 (VU)



左翼を伸ばし尾羽を広げる成鳥 鳥取市水尻池 2017.12.30 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内の越冬個体数が大変少ない。定期渡来地だった中海への飛来が途絶え、近年飛来しているのは鳥取市のみ。

■**特徴**：全長 90 cm 内外。嘴は成鳥は淡黄色で幼鳥は黒い。全身黒褐色で成鳥は頭部が淡色、尾羽は白い。幼鳥は尾羽の一部が褐色。脚は黄色。大きな湖沼に生息し、魚類や鳥類を捕食（死体も食べる）。「カッ、カッ、カッ」などと鳴く。

■**分布** 県内：鳥取市、湯梨浜町、米子市などで記録があるが、近年の記録は鳥取市の水尻池や湖山池周辺のみ。大山上空での観察例もある。中海の米子水鳥公園では、2014年の冬を最後に飛来がない。県外：北海道では少数が繁殖、本州以南では冬鳥；ユーラシア大陸北部とグリーンランド西部で繁殖し、中国南東部で越冬。カムチャッカ半島等では留鳥。

■**保護上の留意点**：警戒心が強いいため、人が安易に接近しないことが重要。また、獲物が豊富な池や湖の環境保全も重要。風力発電施設のプロペラへの衝突で死亡事故があるので、飛来地周辺での風力発電所建設は厳禁。

■**特記事項**：国指定天然記念物（1970）、国内希少野生動植物種（1993）。

■**文献**：30, 52, 74, 77, 82.

執筆：桐原佳介

## オオワシ タカ目タカ科

*Haliaeetus pelagicus* (Pallas, 1811)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



湖山池 2008.2.9 / 撮影：三宅哲郎

- 選定理由：県内および西日本での越冬個体数がきわめて少ない。
- 特徴：日本産ワシタカ類中最大で、翼開長は最大で2.5 m。雄<雌。雌雄同色。成鳥は全身が黒色、小雨覆、中雨覆、上下尾筒、尾羽は白。嘴は大きく黄色。成鳥の翼下面の白斑の分布と形状に個体差があり、個体識別可能。おもに水面近くの大魚を捕えるが、カモを捕食することもある。
- 分布 県内：少数が越冬。湖山池には2021年11月末時点で28シーズン連続飛来しており、近畿以西ではおそらく最長記録。翼の白斑から、2008年以降は同一個体の飛来であることが確認されている。近年は毎年12月中旬に飛来し翌年2月末までに北帰することが多く、この間は池内で漁をする姿が見られる。ときには狩漁中のミサゴを襲い魚を奪う。まれに中海などでも確認されるが、未定着。県外：オホーツク海沿岸で繁殖、北海道・東北で越冬。少数が日本海沿いに西日本まで飛来。対馬や韓国での確認例もある。
- 保護上の留意点：主食の大型魚類が減れば、他所に移動する可能性が高い。水中に残された釣糸によって被害を受ける恐れがある。
- 特記事項：国の天然記念物(1970) 国内希少野生動植物(1993)。
- 文献：63。 執筆者：下田康生

## チュウヒ タカ目タカ科

*Circus spilonotus* Kaup, 1847

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



米子市安倍 2014.12.24 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由：河川改修、護岸工事で生息地のヨシ原が減少。
- 特徴：全長50-60 cm くらい、翼開長110-140 cm 程度。カラスとほぼ同大。羽の色は個体変異が大きい。県内には冬鳥として干拓地、農耕地、ヨシ原などに渡来する。主として野ネズミ類や鳥類を捕食する。他のタカ類に比べて体が軽いため、飛翔能力が高い。英名のハリヤーは垂直離着陸戦闘機の名前にもなっており、その特徴をよく表している。
- 分布 県内：全域。県内での繁殖は確認されていない。県外：本州以北で局地的に留鳥、冬季は冬鳥として本州以南に渡来する。国外ではロシア、モンゴル、中国北部等で繁殖、東南アジアで越冬する。
- 保護上の留意点：ハイイロチュウヒと同じくヨシ原に依存するが、近年は河川や湖などの護岸工事、河川敷のゲートボール場、公園整備などで生息環境が急減している。積極的で長期的視点に立った水辺環境の保護対策が早急に望まれる。

執筆者：田中一郎

## ハイイロチュウヒ タカ目タカ科

*Circus cyaneus* (Linnaeus, 1766)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：—



雌成鳥 米子市 2020.12.29 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由：河川改修、護岸工事などにより生息環境のヨシ原が減少し、個体数が減っている。
- 特徴：全長45-50 cm、翼開長100-120 cm 程度。カラスと同大。雄は頭部と翼の上面が灰色で下面が白く先端部が黒い。雌の翼の上面は褐色。雌雄ともに上尾筒が白い。生態はチュウヒとよく似る。冬鳥として農耕地、ヨシ原、干拓地などに渡来する。翼を特徴のあるV字型に保ち低空を飛びながら餌を探す。餌を見つけるとスッと垂直に近い角度で降下して捕食する。餌はおもにネズミやカエルなど。
- 分布 県内：全域。チュウヒよりも少ない。県内では観察例はメスが多く、オスは少ない。県外：北海道から九州地方までと広いが局地的。ヨーロッパ、アジア北部、北アメリカ等に広く分布。日本や東南アジアには越冬のため渡来する。
- 保護上の留意点：近年河川や湖で護岸工事が進み、大規模なヨシ原は急速に消失した。本来の水辺環境の回復が必要。

執筆者：田中一郎



**ツミ** タカ目タカ科  
*Accipiter gularis* (Temminck & Schlegel, 1844)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



日野郡江府町木谷沢 2013.6.9 / 撮影：徳永年彦

- 選定理由**：確認例が少なく、個体数が少ないと思われる。
- 特徴**：全長 25–30 cm 程度，翼開長 50–60 cm 内外。オスはヒヨドリとほぼ同大，メスはキジバトより少し小型。日本に生息するタカ類ではもっとも小さい。頭部は黒味が強く，体の上面は暗青灰色，目の周りには黄色いアイ・リングがある。小回りのきく体で林の中の小鳥や昆虫を追いかけ，捕食する。九州以北で夏鳥または留鳥として平地から山地に生息する。
- 分布** 県内：全域に生息するが，記録が非常に少ない。県外：九州以北に留鳥。西日本の繁殖記録は少ない。国外ではモンゴル，中国東部，サハリン等で繁殖し東南アジアで越冬。
- 保護上の留意点**：自然林の保護・保全が重要。関東地方では都市公園や街路樹の中で繁殖している例もあるが，県内では観察例が少なく，生息状況はよくわかっていない。早急に実態調査が必要と思われる。

執筆者：田中一郎

**ハイタカ** タカ目タカ科  
*Accipiter nisus* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



米子市水浜 2019.1.20 / 撮影：田中一郎

- 選定理由**：個体数が少なく環境破壊により生息場所が狭められている。
- 特徴**：全長はオスが 32 cm，メスは 39 cm ほど，翼開長 60–80 cm 前後。オオタカに似るが一回り小さく，キジバトほどの大きさ。キーツ，キィ，キィと鳴く。オオタカとともに鷹狩りによく使われてきた。おもに小型の鳥類を捕食するが，ネズミなどの小動物を捕らえることもある。留鳥または漂鳥で山地の森林で繁殖。冬季には平地の林，河川敷，農耕地にも生息する。
- 分布** 県内：全域。県外：四国以北で留鳥または漂鳥，本州と北海道で繁殖。国外ではヨーロッパ，中近東，シベリア，東アジア等に広く分布。
- 保護上の留意点**：サシバなどと同じく，里山環境の保全が重要と思われる。観察例が少なく，繁殖状況などの調査が十分でないため，今後，詳細な調査が必要である。

執筆者：田中一郎

**オオタカ** タカ目タカ科  
*Accipiter gentilis* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：準絶滅危惧 (NT)



大山町清水原 2021.6.1 / 撮影：田中一郎

- 選定理由**：人里近い低山地で繁殖するため，開発の影響をまともに受けており，県内での生息環境が悪化している。
- 特徴**：全長 50–58 cm，翼開長 105–130 cm ほど。カラス大のタカ。尾羽が長く，黒い眼帯と白い眉斑が特徴的。昔からよく鷹狩りに使われてきた。ヒヨドリ，キジバトなどおもに中型の鳥類を捕食。小型の哺乳類も捕らえる。低山地の森林生態系の頂点に位置し，良好な自然環境の象徴ともなる。
- 分布** 県内：ほぼ県内全域。県外：九州以北で留鳥。国外ではユーラシア大陸と北アメリカ大陸に広く分布。
- 保護上の留意点**：近年，関東地方を中心に生息数が増加傾向にあるが，県内での生息数は多くはない。オオタカの生息地は各種の開発行為が行われる可能性の高い地域であり，その生息環境の保全には事前に十分な配慮が必要である。鳥取県立大山オオタカの森では，継続的な調査が続けられている。しかし，県全体の生息調査，とくに繁殖の調査は不十分。

執筆者：田中一郎

**サシバ** タカ目タカ科  
*Butastur indicus* (Gmelin, 1788)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



伯耆町 2015.6.19 / 撮影：田中一郎

■**選定理由**：環境の変化で餌となるカエル、トカゲ、昆虫類の減少に伴い近年数を減らしている。

■**特徴**：全長 50 cm 前後，翼開長 110 cm くらい。ハシボソガラスほどの大きさのタカ。体の上面は褐色で，白い眉斑がある。喉は白く，中央に特徴的な黒い線がある。下面は白く，褐色の横斑がある。九州～本州の低山地などで繁殖する。ピックイーと特徴のある声で，飛びながらよく鳴くので見つけやすい。

■**分布** 県内：全域。近年観察例が減少している。県外：東南アジアで越冬し，九州から本州に夏鳥として渡来する。一部は南西諸島で越冬する。

■**保護上の留意点**：近年，秋の渡りに観察される数が激減している。おもにカエルやトカゲ，昆虫類などを餌としているので，これらが多く生息できる低地の農村地帯のような「里山」の環境を整備することが望ましい。近年，耕作を放棄する田畑が増えていることも減少の一因と考えられる。

執筆：田中一郎

**ノスリ** タカ目タカ科  
*Buteo buteo* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



南部町 2019.11.27 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：冬期を中心に記録があるが個体数は多くない。

■**特徴**：全長 55 cm 内外，翼開長 140 cm 内外。頭部は淡褐色で，のどにひげ状の褐色斑がある。体色の濃淡や模様は個体変異があるが，体と尾の上面，脇腹は褐色。胸から腹にかけて淡黄白色で黒褐色の縦斑がある。翼下面は淡褐色で，飛翔時風切先端と翼角の黒色斑がよく目立つ。低山で繁殖。冬季には農耕地，草地，河川敷など開けた環境に生息し，上空で頻繁に低空飛翔をして，地上の小動物や小型の鳥類などを捕食する。

■**分布** 県内：県内各地の山林，農耕地，河川敷など。県外：四国から北海道に留鳥。大東諸島，小笠原諸島にそれぞれ別亜種が生息する。

■**保護上の留意点**：草原や低木林，河川敷などの生息環境を保全するとともに夏季の生息実態調査が必要。

■**文献**：23, 90.

執筆：岡垣大志

**イヌワシ** タカ目タカ科  
*Aquila chrysaetos* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



撮影：徳永年彦

■**選定理由**：県内での繁殖地は中国山地沿いに限られ，生息数，繁殖成功率も著しく減少し，絶滅の危機に瀕する（現在では数つがい程度）。

■**特徴**：全長 90 cm，翼開長 200 cm にもなる全身ほぼ黒褐色の大型のワシ。県内でのつがいの行動圏は 60–90 km<sup>2</sup> と拡大。急峻な岩壁の岩棚や大木の樹幹などで営巣し，1–2 月に 2 卵産むが，育つのは普通 1 羽。本来は草原性で，開けた場所で中型の哺乳類，鳥類，爬虫類などを捕食する。

■**分布** 県内：東部山岳地帯から大山山系までの落葉広葉樹林帯にある崖壁がそそり立つ急峻な山岳部に生息。県外：北海道，本州に生息（九州，四国では絶滅状態にある）。世界的には北半球に広く分布する。

■**保護上の留意点**：落葉広葉樹が主体の自然林の保全，生息地周辺の開発行為の規制，とくに生息域への大規模発電施設などの設置は，生息環境に大きな影響を及ぼすため十分な配慮が必要。生息地内の針葉樹植林地の伐開による狩場の創設，観察者などが生息中心域へ接近しない対策が望まれる。

■**特記事項**：国の天然記念物（1965 年），国内希少野生動植物種（1993 年），鳥取県特定希少野生動植物種（2002）。

■**文献**：20, 57, 94, 95, 96.

執筆：岡垣大志



**クマタカ** タカ目タカ科  
*Nisaetus nipalensis* Hodgson, 1836

鳥取県：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)  
環境省：絶滅危惧ⅠB類 (EN)



伯耆町 2017.1.1 / 撮影：徳永年彦

- 選定理由**：県下の山林で繁殖するが個体数が少ない。
- 特徴**：全長 70-80 cm ほど、翼は比較的短めで開長 150 cm 内外、幅が広く後縁にふくらみがある。尾は長めで幅が広く、森林内での飛行に適した形態。後頭の羽毛は長めで冠羽状。飛行時翼下面の黒い黄斑、尾羽の黒褐色の縞模様が目立つ。餌はノウサギ、ヤマドリ、ヘビなど中型の哺乳類、鳥類、爬虫類。
- 分布** 県内：標高 200 m 以上のほぼ全域の、急峻な斜面をもつ山地森林に生息。県外：北海道、本州、四国、九州の山地森林；台湾、中国南部など。
- 保護上の留意点**：落葉広葉樹林を中心とした自然林の保護、針葉樹植林地の広葉樹林への転換や、荒廃を防ぐための間伐などの手入れ。シカの食害による下層植生の衰退により、餌動物減少が懸念される。また、森林伐採を伴う開発行為の抑制、とくに、大規模発電施設などの設置は、生息環境に大きな影響を及ぼすため十分な配慮が必要。
- 特記事項**：国内希少野生動物種（1993 年）、鳥取県特定希少野生動物種（2002 年）。
- 文献**：20, 48, 103. 執筆：岡垣大志

**コノハズク** フクロウ目フクロウ科  
*Otus sunia* (Hodgson, 1836)

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)  
環境省：—



鳥取県内 2019.7.12 / 撮影：保井 浩

- 選定理由**：山地の広葉樹林に夏鳥として飛来するが数は少ない。
- 特徴**：全長 20 cm ほど、日本産フクロウ類中最小。虹彩は黄色、体は灰褐色に褐色、黒色、淡橙色などの色が複雑に入り混じる。まれに全身が赤褐色の赤色型も見られる。県内ではブナを主とする大木の残る落葉広葉樹林に生息し、おもに夜行性の昆虫類を捕食する。5-6 月頃樹洞で繁殖し、夕方から夜間、まれに薄暗いときにブッキョッコーと特徴のある声で鳴く。日中は薄暗いこずえでじっとしていることが多く、見つけることは容易ではない。
- 分布** 県内：ブナのある広葉樹林帯に生息するが局所的。県外：北海道から九州までの日本各地、ロシア沿海州地方、朝鮮半島、中国東部に夏鳥として渡来。冬は東南アジアからインド、アフリカ大陸などで越冬する。
- 保護上の留意点**：これまで確認されている生息地の自然環境の保全と、県下で同様の環境を有する森林の保護が必要。近年のシカの食害による下層植生衰退は、昆虫類の減少につながり、採餌環境の悪化が憂慮される。
- 文献**：39. 執筆：岡垣大志

**フクロウ** フクロウ目フクロウ科  
*Strix uralensis* Pallas, 1771

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



南部町 2012.5.1 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：営巣に用いる大きな樹洞のある巨木の減少などで、個体数が減少傾向にある。
- 特徴**：カラスくらいの大きさの留鳥でネズミ類を主食とする。低山から亜高山までの各種の樹林に生息し 3-5 月頃繁殖する。県内では雑木林などの山林で観察されるが、時には市街地周辺でも声が聞かれる。「ホッホッゴロスケホッホッ」という特徴のある鳴き声により識別は容易。
- 分布** 県内：人里近くの山林や農耕地で観察される。県外：南西諸島のぞく日本全国；スカンジナビア半島からシベリア、極東ロシア、中国東北部、朝鮮半島。これらの全域で留鳥。
- 保護上の留意点**：樹洞を供給する巨木の確保（または大型の巣箱の設置）が重要と考えられる。またネズミ類を主食とするため、生息にはある程度広面積の樹林や草地を必要とする。夜行性のため、鳴き声が目立つ鳥である割には繁殖状況の資料が乏しい。

執筆：吉田良平

## アオバズク フクロウ目フクロウ科

*Ninox scutulata* (Raffles, 1822)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



南部町 2019.8.5 / 撮影：桐原佳介

■選定理由：近年、観察例が減少。

■特徴：ハトぐらいの大きさのフクロウの仲間。蛾を主食とする。夏鳥として渡来し、平地から山地の公園・神社などの巨樹の樹洞で繁殖する。県内ではおもに平野部の社叢林や低山地に生息し、夜間に「ホッホッ」という鳴き声は特徴的で識別しやすい。県内での繁殖は確実だが数は少なく、資料は乏しい。

■分布 県内：各地の平野の樹林で記録がある。県外：日本全国；東アジアで繁殖し、南アジア、東南アジアで越冬する。

■保護上の留意点：本種の繁殖地となる平野や低山地の林地は宅地開発等により減少傾向にある。また一見よく保護されているようにみえる社叢林でも、営巣に適した樹洞のある巨樹は減少傾向にある。大径木または巣箱の設置が重要である。

執筆：吉田良平

## トラフズク フクロウ目フクロウ科

*Asio otus* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



ねぐらで休息中。背景にもう1羽いる。米子水鳥公園 2009.11.6 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団 (桐原佳介)

■選定理由：県内の個体数が大変少ない。

■特徴：全長 36 cm 内外。背面は灰褐色で黒褐色と茶褐色の細かい斑模様があり、腹面は淡褐色で黒褐色の太い縦斑と細い横斑がある。趾は淡褐色の羽毛で覆われる。頭部には1対の耳状の長い羽角がある。虹彩は橙色。夜行性で、昼間はよく茂った樹木の茂みをねぐらとする。ねぐらには複数がまとまっていることがある。おもにネズミ類を捕食する。

■分布 県内：鳥取市と米子市で記録がある。かつては米子水鳥公園周辺によく出現し、園内にねぐらも確認されていたが、近年の記録はほとんどない。中海の干拓地や周辺の農耕地では、夜間に時々確認されている。県外：本州中部以北で局地的に繁殖して冬は南下するほか、関東以南に冬鳥として飛来する。海外ではユーラシア大陸とアメリカ大陸の中緯度地域で繁殖し、北方で繁殖する個体は冬に南下する。

■保護上の留意点：ねぐらとなる茂みと採食環境となる農耕地が隣接する環境の保全。カメラマンが集まると休息を妨げるため、ねぐらの位置を公開しないこと、観察時にはねぐらに近づかず、十分な距離をとること。

■文献：33, 50, 64, 66, 87.

執筆：桐原佳介

## コミミズク フクロウ目フクロウ科

*Asio flammeus* (Pontoppidan, 1763)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：—



米子水鳥公園 2015.11.22 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団 (桐原佳介)

■選定理由：近年の農耕地の環境変化・耕作放棄などにより、観察される回数が減少している。

■特徴：全長 38 cm 内外。山吹色の中型のフクロウで、日本には、越冬のために飛来する。農耕地やヨシ原など開けた地域で夕方に観察されることが多い。農耕地や草地などでネズミなどを食べる。

■分布 県内：岩美町、鳥取市、湯梨浜町、北栄町、米子市、境港市の平野部で記録がある。県外：イギリス・ヨーロッパ全域・ユーラシア大陸北部・北アメリカ南部で繁殖し、熱帯から温帯にかけて越冬する。

■保護上の留意点：日本の農村環境の変化が、飛来数の減少の原因であり、農村全般の保全対策が必要である。

執筆：神谷 要



**アカショウビン** ブッポウソウ目カワセミ科  
*Halcyon coromanda* (Latham, 1790)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



江府町 2021.5.23 / 撮影：徳永年彦

■**選定理由**：スギなどの人工林の増加により、営巣に適した広葉樹の大径木が減少し、生息環境が悪化している。

■**特徴**：夏鳥として山地の林、溪流に渡来する。ピオロロロローと聞こえるよく通る雄のさえずりは特徴的で、存在を確認しやすいが、よく繁った薄暗い林内のため姿を見る機会は少ない。5-7月頃、樹洞や崖の洞穴に営巣。サワガニ、カエル、小魚などを捕食する。

■**分布** 県内：奥山の林、溪流にみられるが、個体数は少ない。県外：南西諸島から北海道まで日本全国と朝鮮半島、中国東北部、ヒマラヤからタイ北部で繁殖。フィリピン、インドネシアなどで越冬。

■**保護上の留意点**：ブナなどの広葉樹林の保護および再生が必要。営巣のための樹洞を供給する大径木の保護も重要である。

執筆者：吉田良平

**ヤマセミ** ブッポウソウ目カワセミ科  
*Megaceryle lugubris* (Temminck, 1834)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：—



伯耆町 2014.7.22 / 撮影：徳永年彦

■**選定理由**：生息適地、個体数ともに減少している。

■**特徴**：留鳥として、県内各地の山間部の河川・湖沼・ダムで年中観察される。平野部ではまれ。餌は淡水魚、カエル、サワガニなど。土質の切り立った崖に横穴を掘って営巣する。繁殖期は3-8月。

■**分布** 県内：山間部の河川・湖沼・ダムでみられる。県外：屋久島・種子島以北の日本全域、南千島；アフガニスタンからベトナム中部、中国南部から東北部。

■**保護上の留意点**：よく目立つ鳥であり、目撃記録はあるが、生息数は確実に減少している。県内の営巣地について資料が乏しい。

執筆者：吉田良平

**ブッポウソウ** ブッポウソウ目ブッポウソウ科  
*Eurystomus orientalis* (Linnaeus, 1766)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)  
環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



南部町 2017.5.16 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：1990年代のほぼ絶滅状態から少し回復したが、個体数は少ない。

■**特徴**：ハトより少し大きい。足と口ばしが赤く、体は濃青色。5月上旬に広葉樹や針葉樹の里山に渡来し繁殖する。ほとんどが巣箱で繁殖するが一部自然木での繁殖も確認されている。ゲツゲツと鳴き、大型の甲虫類やトンボ、セミなどを餌とする。樹洞の減少や巣穴として利用していた木製電柱のコンクリート化で急激に減少したが、巣箱の設置で個体数は少し回復している。

■**分布** 県内：日南町、南部町、日野町、琴浦町、三朝町では巣箱で繁殖。県外：本州以南の各地で記録がある。南部町の個体がインドネシアで越冬していることはわかっている。

■**保護上の留意点**：営巣可能な大きな樹洞を確保するなど里山の自然を守ること。巣箱の設置は個体数の増加に有効である。

■**特記事項**：鳥取県特定希少野生動植物。

執筆者：土居克夫

## オオアカゲラ キツツキ目キツツキ科

*Dendrocopos leucotos* (Bechstein, 1802)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



撮影：徳永年彦

■**選定理由**：個体数が少ない。営巣木となる大木がなくなったことや山地の開発や生息地の分断などで個体数が減少したと思われる。

■**特徴**：大型のキツツキで全長 28 cm 程度。アカゲラに似るが、胸に黒色の縦斑があり、上尾筒は白色。標高の高い、広葉樹の山地に留鳥として生息する。エサは樹皮内の昆虫の幼虫など。キョツ、キョツと鳴く。生息数は少なく、生息状況はよくわかっていない。

■**分布** 県内：県内の山地。 県外：日本の各地に生息。ロシアからヨーロッパまで広く分布。

■**保護上の留意点**：営巣に必要な大木のある森林の保護や里山の再生が必要。県内の個体数など調査が必要。

執筆：土居克夫

## コチョウゲンボウ ハヤブサ目ハヤブサ科

*Falco columbarius* Linnaeus, 1758

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



南部町三崎 2020.1.15 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：農耕地の荒廃、河川敷の草原などの開発により生息地が減少している。

■**特徴**：全長 30 cm 内外の小型の猛禽。ハヤブサ類としては明瞭な眉斑をもつ。冬鳥として、海岸の森林や海岸砂丘、干拓地、河川敷、農耕地、ヨシ原などに飛来し、おもに小型の鳥類や小哺乳類を捕食する。

■**分布** 県内：県内の平野部の農耕地・草原・ヨシ原で観察されている。 県外：全国的に冬鳥。ユーラシア北部と北アメリカ北部で繁殖し、ヨーロッパ、日本、中国南部、北アメリカ南部、中米などで越冬する。

■**保護上の留意点**：農耕地・平野部の草原・海岸の植生の保全が必要である。農耕地や河川敷の安易な改変は避けるべきである。

執筆：神谷 要

## チゴハヤブサ ハヤブサ目ハヤブサ科

*Falco subbuteo* Linnaeus, 1758

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



南部町 2013.7.15 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：旅鳥として県内を通過するが観察例は少なく生息状況がよく分かっていない。

■**特徴**：ハトより少し大きいサイズの小型のハヤブサ。翼は細長くとまっている時は尾羽と同程度か少し長い。体の上面は青灰黒色で頬に黒斑がある。腹部に黒色の縦斑があり、下腹部から足の付け根が赤褐色。飛翔中に昆虫を捕食する。

■**分布** 県内：米子市、南部町、伯耆町等で観察の記録があるが西部地域のみ。東、中部（鳥取市、岩美町、北条町）にも過去には記録がある。 県外：おもにユーラシア大陸の中南部に広く生息している。日本では、北海道、東北地方、長野県の一部地域に夏鳥として飛来する。

■**保護上の留意点**：定期的に通過していると思われるが、観察記録はわずかで生息実態が分かっていない。生息状況の調査が必要である。

■**文献**：63, 99.

執筆：戸川信吾



**ハヤブサ** ハヤブサ目ハヤブサ科  
*Falco peregrinus* Tunstall, 1771

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：絶滅危惧II類 (VU)



米子市一部 2019.1.20 / 撮影：田中一郎

- 選定理由**：繁殖率が低下しており、深刻な状況にある。
- 特徴**：全長 40–50 cm 程度、翼開長 85–120 cm ほどで、カラスより少し小さい。留鳥として平地から山地にかけての河川、農耕地、海岸などに生息。おもに小型の鳥類を捕食する。上空からの急降下は時速 300 km を超えるといわれる。
- 分布** 県内：崖のある海岸部や河口付近、干拓地。県外：九州以北で留鳥、冬季は全国的に海岸部や河川で見られる。
- 保護上の留意点**：県内の繁殖適地はきわめて限定される。県東部のある繁殖地では風雨を防ぎ、外敵が侵入しにくい岩棚の窪みがあり毎年安定して数羽のヒナが巣立っている。営巣適所が限られるので、人工的に岩棚や窪みを作り環境を整えることも必要であろう。近年、全国的に都市部へ進出し、高層ビルを断崖に見立て、ドバトなどを餌に、ビルのベランダなどで繁殖する例が増えた。県内でも、同一ビルで5年間連続の繁殖例がある。今後の世代の適応に要注目である。

執筆者：田中一郎

**ヤイロチョウ** スズメ目ヤイロチョウ科  
*Pitta nympha* Temminck & Schlegel, 1850

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)  
環境省：絶滅危惧IB類 (EN)



高知県内 2018.6.14 / 撮影：保井 浩

- 選定理由**：個体数が少ない。
- 特徴**：全長 18 cm。頭上は黒色と茶褐色。背は緑色。腹の中央部と下尾筒は赤色のカラフルな鳥。夏鳥として5月頃に渡来し、よく繁った針葉樹林や広葉樹林にすむ。ホヘン、ホヘンとよくとる声で鳴く。餌はミミズなど。県内では春から夏にかけて山地で記録があるが、観察例はまれである。繁殖記録はないが、可能性は高い。
- 分布** 県内：県内の里山、森林。県外：四国、九州を中心に本州中部以南の各地。東南アジアで越冬。
- 保護上の留意点**：山地の保護、保全が必要。県内での生息調査が急務である。
- 特記事項**：「種の保存法」規制対象種（国内希少野生動物）。

執筆者：土居克夫

**サンショウクイ** スズメ目サンショウクイ科  
*Pericrocotus divaricatus* (Raffles, 1822)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：絶滅危惧II類 (VU)



鳥取市安蔵 2016.6.5 / 撮影：吉田 亮

- 選定理由**：広葉樹の高木が繁殖に必要であるが、広葉樹林の伐採、開発およびスギ・ヒノキの人工林の拡大、さらにカシノナガキクイムシが媒介するナラ菌によるカシ・ナラ類の集団枯死（ナラ枯れ）の拡大により、生息環境が悪化している。
- 特徴**：全長約 20 cm。尾が長い。体は細く、上面は青灰色で下面全体が白い。オスの額と前頭は白く、頭頂から後頭は黒い。メスの額と前頭は白く、頭頂から後頭は灰色。高い梢に直立した姿勢でとまる。森林の樹上をよく鳴きながら飛ぶので姿・声とも確認しやすい。「ピリリ、ピリリ」という鳴き声が名前の由来になっている。
- 分布** 県内：夏鳥として県内の森林に渡来し繁殖するが、数は少ない。県外：本州以南に夏鳥として渡来し、低山の森林で繁殖する。北海道では記録がなく迷鳥とされている。亜種リュウキュウサンショウクイは沖縄本島では留鳥であるが、九州から四国など太平洋側を北上しており、山陰地方での動向にも注意する必要がある。
- 保護上の留意点**：繁殖地である広葉樹の森林を再生する必要がある。
- 文献**：19, 44, 45, 63, 100。

執筆者：津森 宏

## サンコウチョウ スズメ目カササギヒタキ科

*Terpsiphone atrocaudata* (Eyton, 1839)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



南部町 2021.6.21 / 撮影：桐原佳介

■選定理由：県内の限られた環境で繁殖。個体数は多くない。

■特徴：全長雄 45 cm, 雌 17 cm 程度。雄の中央尾羽は長い。くちばしと目の周りは淡青色でよく目立つ。上面は黒く見える。「月, 日, 星, ホイホイ」と聞こえる声で鳴く。これが種名の由来。5月, 県内の里山の薄暗い針葉樹林と落葉広葉樹林に渡来し繁殖する。樹上の股などにカップ状の巣を作る。個体数は多くない。

■分布 県内：里山の杉林と落葉広葉樹の混合林に多い。県外：本州以南の各地で繁殖する。東南アジアで越冬する。

■保護上の留意点：里山の林や森林の保護, 保全。

執筆：土居克夫

## チゴモズ スズメ目モズ科

*Lanius tigrinus* Drapiez, 1828

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧IA類 (CR)



伯耆町 2020.7.7 / 撮影：田中一郎

■選定理由：鳥取県内では確認例がきわめて少ない。

■特徴：全長 18 cm 程度, スズメよりすこし大きい。モズの仲間としては小さい部類に入る。白い腹と青灰色の頭をしており, 昆虫類を主食としている。県内では夏鳥として少数が渡来する。

■分布 県内：平地から山地の開けた林を好む。県内では大山町, 伯耆町の大山山麓の林で少数, 繁殖が確認されている。県外：本州では中部以北では夏鳥, それより南では旅鳥。

■保護上の留意点：一度渡来が確認された場所では複数年にわたり観察されているが, 情報が拡散して多数のカメラマンやバードウォッチャーを呼び寄せると繁殖が阻害される恐れがあり注意が必要。餌の捕りやすい, かつての里山のような生息環境を残すことが重要と思われる。

■文献：63.

執筆：田中一郎

## ホシガラス スズメ目カラス科

*Nucifraga caryocatactes* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



大山 (夏山登山道 8 合目下付近) 2019.12.10 / 撮影：田村晴久

■選定理由：鳥取県は本州での分布西限域にあたるが, 近年の観察例が少なく県内での生息状況がよくわかっていない。

■特徴：全長 35 cm 内外。全身黒褐色で楕円形の白斑を密にあしらう。亜高山帯の針葉樹林を中心に生活し, ハイマツなど針葉樹の種子のほか, 広葉樹の果実, 昆虫などを食べ, 山小屋のゴミをあさることもある。

■分布 県内：山地上部のキャラボク林やブナ林などで観察されるが, 最近 20 年間の記録はごくわずかで, 大山周辺に限られる。それ以前では, 道後山, 毛無山, 扇ノ山, 高山 (鳥取市), 東山 (若桜町), 氷ノ山など。過去には大山での繁殖報告があるが, 近年での状況は不明。県外：本州中部以北の亜高山帯や高山帯に通年生息するほか, 中国・四国・九州の各地方でごく局所的に分布; ユーラシア大陸の亜高山帯や高山帯に広く分布。

■保護上の留意点：山地上部の自然林を保全するとともに, 県内での生息および繁殖状況の調査が望まれる。

■文献：14, 42, 63, 104.

執筆：一澤 圭



**コシアカツバメ** スズメ目ツバメ科  
*Hirundo daurica* Laxmann, 1769

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)  
環境省：—



南部町 緑水園 2015.4.29 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：営巣場所が局地的であるうえに、営巣環境が減少している。  
■**特徴**：全長 19 cm 内外。頭頂から背中にかけて黒くて青い光沢がある。顔から腹にかけてはバフ白色で黒い縦斑が密にあり、脇から下腹にかけては橙色味を帯びる。目の後方は橙色。腰は橙色、翼は黒く、尾羽は黒く外側が細長く突出する。「ジュピッ ジュリリリリ」などと鳴く。飛びながら昆虫類を捕食。コンクリート製建物の天井と壁の境界に泥で徳利形の巣を作り、集団営巣することが多い。

■**分布** 県内：夏鳥として県内各地に飛来し、秋の渡り時には大群がみられることがある。県外：全国各地に飛来するが関東以南に多く、四国と九州の一部では越冬するものもいる。海外では南ヨーロッパ～東アジアで繁殖し、アフリカ～南アジアで越冬。アフリカ中緯度域やインドでは留鳥。

■**保護上の留意点**：営巣はコンクリート製建物に強く依存するので、営巣環境となっている建物では本種を追い払わずに、巣の直下に落ちる糞の対策をして見守ることが望ましい。また、営巣のみられる建物を改修する際には、繁殖期を避けて施工し、外壁に泥が付着しにくい素材を使わないこと。

■**文献**：34, 55, 84, 85, 86. 執筆者：桐原佳介

**キクイタダキ** スズメ目キクイタダキ科  
*Regulus regulus* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



南部町 2012.12.30 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：冬季に観察されるが個体数が少ない。松枯れの影響で個体数の減少が心配される

■**特徴**：全長 10 cm、日本産の鳥では最小である。上面はオリーブ褐色。頭頂部は黄色で雄には赤色の羽毛がある。本州中部以北の針葉樹林で繁殖する。餌は昆虫やクモ類。冬季は低地に移動もしくは南下し、全国各地で観察される。県内ではおもに冬季に針葉樹林で観察されるが、高山での繁殖がないとはいえない。

■**分布** 県内：冬鳥として各地での記録がある。県外：中部以北で繁殖。冬季は全国各地で記録がある。ヨーロッパ、ロシアなどのユーラシア大陸に広く分布、冬季は南下する。

■**保護上の留意点**：里山や山地の針葉樹林の保護。繁殖の可能性について生息調査が必要。

執筆者：土居克夫

**メボソムシクイ** スズメ目ウグイス科  
*Phylloscopus xanthodryas* (Swinhoe, 1863)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)  
環境省：—



米子水鳥公園 2019.11.2 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団（桐原佳介）

■**選定理由**：県内での繁殖確認例が減少している。

■**特徴**：全長約 13 cm でメジロよりやや大。上面は緑褐色、眉斑は黄白色で長く明瞭、下面は灰褐色。雌雄同色。夏季におもに落葉広葉樹林から亜高山帯樹林、高山帯にかけて渡来し、林内低層や灌木層で活動。高木の林内よりも稜線近くの低木帯に多い。おもに昆虫を捕食するが、秋季には果実も食べる。さえずりは「チョリ、チョリ、チョリ、チョリ」と四声で尻上がりに大きくなる。春秋の渡りの時期には平地でも囀りや姿が確認される。類似種のオオムシクイやコムシクイとは、さえずりの違いで識別可能。

■**分布** 県内：県内の繁殖地は標高 1200 m 以上の山地に限定される。扇ノ山、氷ノ山、那岐山、沖ノ山、三室山、三国山、毛無山（江府町）および大山山系のブナ林帯上部や風衛低木帯で繁殖期に確認している。扇ノ山では 2005 年 6 月を最後に確認できていない。県外：本州、四国、九州の高所で繁殖し、中国南部、フィリピン、インドネシアなどで越冬。

■**保護上の留意点**：ブナ林帯上部や高山山頂部の保護が必要。温暖化による繁殖地の縮小・消滅が懸念される。

■**文献**：63, 92, 98. 執筆者：下田康生

## エゾムシクイ スズメ目ウグイス科

*Phylloscopus borealoides* Portenko, 1950

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



島根県美保関 2001.5.24 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：県内の高標高山岳地帯で局所的に繁殖の可能性あり。繁殖地としては本州の西限域に当たるが、近年は夏季の生息記録はなく、春と秋に少数が通過するのみ。

■**特徴**：体長 12cm ほど。上面は緑色身を帯びた茶褐色で、のどから下尾筒にかけて眉斑は白く、野外で他のムシクイ類と見分けることは困難だが、ヒーツーチーと繰り返す高く細いさえずりで区別できる。おもに北海道や本州中部以北、四国の亜高山帯の落葉広葉樹林や、針広混交林に夏鳥として渡来し、谷間に近い急斜面のよく茂った樹林で繁殖する。

■**分布** 県内：夏季に氷ノ山、三室山で記録がある。春の渡来期に県下の各海岸部を通過するのが確認できる。県外：北海道、本州中部以北、紀伊半島と四国の一部、サハリンで繁殖。中国東北部、東南アジアで越冬。

■**保護上の留意点**：県下山岳地帯高標高地の自然林保護、シカの食害による下層植生衰退の防止など、生息環境を保全するとともに、夏季の生息実態調査が必要。

■文献：41.

執筆：岡垣大志

## セッカ スズメ目セッカ科

*Cisticola juncidis* (Rafinesque, 1810)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



米子水鳥公園 2020.9.18 / 撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団（桐原佳介）

■**選定理由**：繁殖に必要な草原環境の悪化や減少が懸念される。

■**特徴**：全長約 12 cm。背面は黄褐色に黒の縦斑で、腹面は淡黄褐色。尾は黒褐色、下面には黒と白の縞模様がある。本州以南の低地から山地の草原で繁殖する。飛びながらヒツヒツヒツヒツ・・・と鳴き、下降しながらチャツチャツ、チャツチャツ、・・・と続けるのが特徴的。草の間で昆虫やクモをとらえる。鳥取県では4月から8月での記録が多いが、冬にも観察されている。

■**分布** 県内：繁殖期では米子水鳥公園の他、日野川や天神川、加勢蛇川、千代川といった河川の河口周辺で記録が多く、これらは重要な繁殖地と思われる。その他、各地の河川敷や海岸林、空港内の草地などで観察例がある。県外：本州以南；東南アジア、インド、アフリカ、ヨーロッパ南部など。

■**保護上の留意点**：繁殖地となるヨシ原や河川敷草地などを保全するとともに、草刈等の管理を行なう際は繁殖期を避けるなどの配慮が必要である。

■文献：12, 24.

執筆：一澤 圭

## ゴジュウカラ スズメ目ゴジュウカラ科

*Sitta europaea* Linnaeus, 1758

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



大山 2017.5.31 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：森林開発等による繁殖適地の減少・環境悪化が懸念される。

■**特徴**：全長約 14 cm。背面は青灰色で腹面は白色、脇は橙色。顔には黒い過眼線が目立つ。木の幹にたてにとまり、縦横無尽に走り回って昆虫や木の実などを食べる。頭を下にして幹を降りたり、横枝の下側を歩いたりできるのも特徴的。山地の落葉広葉樹林にすみ、樹洞に営巣する。

■**分布** 県内：各地の山地落葉広葉樹林で観察されている。繁殖期での記録は大山、氷ノ山、扇ノ山、三徳山、安蔵森林公園（鳥取市）、八東ふるさとの森（八頭町）など。県外：北海道、本州、四国、九州；ユーラシア大陸に広く分布。

■**保護上の留意点**：営巣に樹洞を必要とするため、樹洞ができるような大木やその後継となる樹木が健全に育つ落葉広葉樹林の保全が必要である。県内での繁殖状況の調査が望まれる。

■文献：8, 13, 25, 98.

執筆：一澤 圭



**ビンズイ** スズメ目セキレイ科  
*Anthus hodgsoni* Richmond, 1907

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



南部町 2020.10.6 / 撮影：桐原佳介

■**選定理由**：鳥取県は本州での繁殖記録地の西限域にあたる。近年では県内の繁殖状況は不明で、繁殖期における観察記録も限定的である。

■**特徴**：全長約 15 cm。背面はオリーブ緑色、腹面は白色で、全身に黒褐色の斑紋をおびる。尾を上下に振りながら地上を歩き、餌をとる。おもに本州中部以北で繁殖し、西日本での繁殖は局地的。繁殖期には山地の明るい林や林縁、高山帯の低木林や岩場などにすみ、オスは複雑な声でさえずる。冬季には暖地へ移動し、農耕地や海岸、市街地の公園などでも観察される。

■**分布** 県内：大山では繁殖確認記録がある。繁殖期の観察記録としては過去に氷ノ山や扇ノ山でのものがあるが、近年では大山でのわずかな記録に限られる。非繁殖期では低山から海岸付近にかけて各地で記録されている。県外：北海道・本州・四国・九州・南西諸島（繁殖は中部地方以北と西日本の高山域）；ユーラシア大陸東部。

■**保護上の留意点**：大山をはじめとする県内高標高地での繁殖状況を調査することが望まれる。

■**文献**：7, 11, 40.

執筆：一澤 圭

**カヤクグリ** スズメ目イワヒバリ科  
*Prunella rubida* (Temminck & Schlegel, 1848)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)  
環境省：—



鳥取市安蔵 2016.12.3 / 撮影：加藤貞和

■**選定理由**：県内の繁殖地がきわめて限定される。

■**特徴**：全長約 14 cm でスズメよりやや小さい。全身暗褐色の地味な色彩で雌雄同色。夏季に亜高山帯から高山帯のハイマツ群落などの低木帯で繁殖し、秋から冬にかけては低地の灌木帯や沢沿いの藪に移動する。常にならぬ中を移動するためにつけにくい、繁殖期には「チリチリ」、または「ツリリリ」と細く高い声のさえずりでその存在を確認できる。

■**分布** 県内：高山の山頂付近でわずかに繁殖するのみ。扇ノ山、氷ノ山、三室山および大山の山頂付近の低木帯で繁殖確認の記録がある。扇ノ山山頂では 2011 年 6 月を最後に確認が途絶えており、この地域での繁殖地が消滅した可能性がある。冬季には県内の平地でも見ることがある。県外：北海道、本州、四国の亜高山帯で繁殖する。冬季には越冬のため南下し、九州では冬鳥である。国外繁殖は南千島のみで、日本固有種と言ってよい。

■**保護上の留意点**：きわめて限定された地点でしか繁殖していないため、キャラボク群落等の山頂部低木帯の保護が必要。温暖化による繁殖地の縮小・消滅が懸念される。

■**文献**：35, 63, 98.

執筆：下田康生

**コマドリ** スズメ目ヒタキ科  
*Luscinia akahige* (Temminck, 1835)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



伯耆町 2016.4.10 / 撮影：徳永年彦

■**選定理由**：県内の繁殖地がきわめて限定される。

■**特徴**：全長約 14 cm でスズメよりやや小さい。雄は頭部と胸は赤橙褐色、腹部は黒灰色。雌は雄よりも全体に色が薄い。亜高山のササのある針葉樹林・針広混交林で繁殖する。地上のくぼみに枯葉などを使ってお椀型の巣をつくる。低木の枝の上や地表で主として昆虫類を捕食する。県内では毎年4月中下旬ごろに、繁殖地へ移動中の個体がさえずる「ヒン、カラララ・」とよく響く声を低山帯でも確認することができる。秋季の県内での確認例はごく少なく、南下経路は不明。

■**分布** 県内：氷ノ山、那岐山および大山山系の渓谷の源流部で夏季に確認記録があり、繁殖している可能性が高い。氷ノ山では 2016 年 8 月以降、さえずりの確認ができていない。県外：北海道から九州までの亜高山帯で繁殖し、中国南部で越冬。

■**保護上の留意点**：きわめて限定された地点でしか繁殖していないため、現状の生態系の維持が必要。温暖化による繁殖地の縮小・消滅が懸念される。

■**文献**：98.

執筆：下田康生



## コルリ スズメ目ヒタキ科

*Luscinia cyane* (Pallas, 1776)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



氷ノ山 2013.5.5 / 撮影：加藤貞和

■選定理由：県内のブナ林で繁殖するが、個体数は少ない。

■特徴：全長約 14 cm でスズメよりやや小さい。雄は上面が暗青色，下面是純白。雌はオリーブ褐色で腹部は白っぽい。夏季に山地の落葉広葉樹林で繁殖する。地上の倒木の下などに枯葉等でお椀型の巣を作る。林床で昆虫などを採食し，めったに藪の上には出ない。さえずりは「ヒン，カラララ…」でコマドリに似るが，「チッチッチッ」という前奏を伴うことが多い。またコマドリのさえずりが常に一定の調子であるのに対して，本種はさまざまに変奏を行う点が異なる。四月下旬には県内各地で渡りの初陣が確認されているが，秋の渡去時期は不明。

■分布 県内：標高 1000 m 付近のササ藪のあるブナ林帯で繁殖。扇ノ山，氷ノ山等の東部山地，大山周辺等のブナ林帯。県外：北海道，本州中部以北のブナ林帯で繁殖し，中国南部，インドシナ半島，フィリピン等で越冬。

■保護上の留意点：従来，本種の生息数は比較的安定していたが，最近，県東部のブナ帯ではシカによる林床のササや下草の食い尽くしが急増している。この激変のため，今後の生息数の変化については十分な注意が必要。

■文献：36, 98.

執筆：下田康生

## ルリビタキ スズメ目ヒタキ科

*Tarsiger cyanurus* (Pallas, 1773)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



伯耆町 2016.1.1 / 撮影：徳永年彦

■選定理由：県内繁殖の可能性は高いが，その地域がきわめて限定される。

■特徴：全長約 14 cm。雄は上面が青色，下面是白色，脇がオレンジ色で非常に美しい。雌は上面がオリーブ褐色で下面是白色，脇はオレンジ色。亜高山帯の針葉樹林，針広混交林で繁殖する。コケや枯葉を使って地表にお椀型の巣をつくる。雄は樹上で「チチッ，チョリチョリチ」などと鳴き，「ルリビタキだよ！」とも聞きなせる。冬季には少数が県内の低山帯の常緑樹林等に飛来し，暗い木陰の地面で採食しているのを見ることがある。

■分布 県内：以前から氷ノ山の山頂周辺で夏季にさえずりが何度も確認されている。また 2019 年 7 月には同山頂近くで雌が目視されており，少数のつがい繁殖している可能性は高い。県外：北海道，本州中部以北，四国の亜高山帯で繁殖し，本州中部以南で越冬。国外では，シベリア南部～中国中部～ヒマラヤで繁殖，中国南部とインドシナ半島で越冬する。

■保護上の留意点：県内ではきわめて限定された地点でしか繁殖していないと推定されるため，現状の生態系の維持が必要。温暖化による繁殖地の縮小・消滅が懸念される。

■文献：63, 98.

執筆：下田康生

## マミジロ スズメ目ヒタキ科

*Zoothera sibirica* (Pallas, 1776)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



伯耆町 2014.4.29 / 撮影：徳永年彦

■選定理由：県内のブナ林で繁殖するが，個体数は少ない。

■特徴：全長約 23 cm のムクドリ大の鳥。雄は全身が黒く，白い眉斑がある。雌は上面がオリーブ褐色で白い眉斑があり，下面是淡褐色。夏季に落葉広葉樹林や針広混交林で繁殖し，渡りの時期には平地や市街地の公園でも見かけることがある。食性は雑食で昆虫，ミミズ，果実などを食べる。藪の中での行動が多いが，雄は樹上でさえずることもあり，その際には姿を確認できる。「キョロン，チー」という短い声を繰り返しながらさえずる。

■分布 県内：県内では標高 1000 m 以上のブナ林帯上部で繁殖する。扇ノ山，氷ノ山，那岐山および大山山系のブナ林で毎年繁殖期に確認されているが，その数は多くはない。県外：北海道，本州中部以北の落葉樹林帯で繁殖し，インドシナ半島で越冬する。国外ではシベリア南部，中国南部，朝鮮半島で繁殖し，インドシナ半島で越冬する。

■保護上の留意点：最近，県東部のブナ帯では，シカ害で林床のササや下草が激減した。本種は樹上に営巣するなど，ある程度樹上性で，コルリほどの影響はないと思われるが，今後の生息数の変化には注意が必要である。

■文献：37.

執筆：下田康生



**トラツグミ** スズメ目ヒタキ科  
*Zoothera dauma* (Latham, 1790)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



米子市湊山公園 2021.1.15 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：県内に周年生息するが、個体数が以前に比べて減少。
- 特徴**：全長約 30 cm でドバトよりやや小さい。頭部と上面は黄褐色で下面は白色、黒褐色の小さな三日月斑が全身に分布する。雌雄同色。留鳥または漂鳥として低山から亜高山の森林に分布。藪の中の薄暗い地面で昆虫やミミズなどを捕食。木の枝の上にコケや木の枝などでお椀型の巣をつくる。夜間や曇天の日中に「ヒー、ヒョー」と口笛のような声でさえずる。そのあとに「チーン」という声が入ることも多い。このサエズリにより、「ヌエ」という架空の怪獣とみなされて恐れられてきた。冬季は市街地の公園や庭に現れ、庭木の実やミミズを探す姿が見られることがある。
- 分布** 県内：繁殖期には平地・低山での確認例は少なく、落葉樹林帯での確認が大半である。冬季は平地や里山での確認例が増える。県外：北海道では夏鳥、本州、四国、九州では周年生息；シベリア南東部、中国東北部、朝鮮半島で繁殖、インド東部、インドシナ半島、フィリピンなどで越冬。
- 保護上の留意点**：もともと繁殖の詳細情報が少ない鳥であり、生息数の変化には注意が必要。

執筆者：下田康生

**ホオアカ** スズメ目ホオジロ科  
*Emberiza fucata* Pallas, 1776

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)  
環境省：—



撮影：徳永年彦

- 選定理由**：高地の草原で繁殖していたが 1998 年以後繁殖記録がない。生息数の減少。
- 特徴**：全長 16 cm ほど。頬が赤褐色で種名の由来となっている。体は茶褐色で胸に縦斑がある。さえずりはホオジロに似る。草原や藪などで繁殖。冬季は南下し水田やヨシ原に生息する。
- 分布** 県内：1990 年代まで大山の草原で繁殖していたが、近年の記録はない。冬季は河川敷やヨシ原での観察例がある。県外：本州中部以北で繁殖。中部以南の繁殖は局部的。冬季は南下する；モンゴル、サハリン、中国北部、朝鮮半島などで繁殖、中国南部、インドシナ半島などで冬鳥。
- 保護上の留意点**：草原の保護。生息調査が必要。

執筆者：土居克夫

**クロジ** スズメ目ホオジロ科  
*Emberiza variabilis* Temminck, 1836

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)  
環境省：—



米子市湊山公園 2021.1.15 / 撮影：桐原佳介

- 選定理由**：県内のブナ林で繁殖するが、個体数は少ない。
- 特徴**：全長約 17 cm でスズメよりやや大。雄は全体に灰黒色で上面には黒褐色の縦斑がある。雌は全体に茶褐色で上面の縦斑も濃茶褐色。夏季に落葉広葉樹林・針葉樹林で繁殖する。藪の中に枯枝等でお椀型の巣を作る。繁殖期には樹上で昆虫などを捕食、非繁殖期には地上で種子などを食べる。おもに林床のササ藪で活動し林冠にはほとんど出ない。藪の中を素早く移動するさまは、姿が黒いのでネズミと間違えそうになるほど。さえずりは「ホーイ、チョイ、チョイ」。冬季は西日本以南に移動、平地にも現れる。
- 分布** 県内：標高 1000 m 付近のササ藪のあるブナ林帯上部で繁殖し、営巣の観察例も数例ある。扇ノ山、氷ノ山、東山、くらます（若桜町）、沖ノ山、三国山、毛無山（江府町）および大山山系のブナ林上部で繁殖。冬季は平地の林でも観察できる。県外：サハリン、カムチャツカ、北海道、本州中部以北の平地～亜高山帯で繁殖し、本州、四国、九州で越冬する。
- 保護上の留意点**：最近、県東部のブナ帯ではシカ害で林床のササ藪や下草が食い尽くされている。生活域が激変しており、今後の生息数は要注意。
- 文献**：38, 63, 98。

執筆者：下田康生

ベニヒワ スズメ目アトリ科  
*Carduelis flammea* (Linnaeus, 1758)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



米子水鳥公園 2020.2.7 /

撮影：公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団（桐原佳介）

■**選定理由**：冬鳥として渡来するが本州中部以北に多く、鳥取では数が少ない。ほぼ越冬地の南限と思われる。

■**特徴**：スズメより小さい。淡褐色の体で眼先から喉にかけて黒く、オス、メスともに頬が鮮やかに赤く、よく目立つ。数羽の小群で行動していることが多く、マヒワの群れに少数が混じることもある。

■**分布 県内**：冬鳥として少数が渡来する。湖岸や河川敷、林道沿いなどで植物の種子を食べる姿を見かけるが、数は多くなく、年次変動が大きい。ほとんど見ない年もある。**県外**：本州中部以北、とくに北海道への渡来数が多い；スカンジナビア半島～シベリア～カムチャツカ～北米北部～グリーンランドで繁殖。南欧、モンゴル、中国、米国などで冬鳥。

■**保護上の留意点**：草本類や灌木など、幅広い植物の種子を餌とするため、これら餌植物の多様性を維持することが重要である。

■**文献**：46, 63, 100.

執筆：吉田 亮

## ■参考文献 鳥類

1. アジア太平洋地域渡り性水鳥保全委員会 (2005) 日本・韓国合同トモエガモカウント調査 (2004). <http://www.jawgp.org/anet/anaf0602.htm>
2. 藤井 幹 (2014) オシドリ. p. 235. In: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編) レッドデータブック 2014 . 2. 鳥類. 日本の絶滅のおそれのある野生生物. 株式会社ぎょうせい (東京), 250 pp.
3. 福田紀生 (2012) オシドリ. p. 41. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
4. 福田紀生 (2012) シノリガモ. p. 42. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
5. 細谷賢明 (1993) オシドリ. pp. 32–33. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
6. 細谷賢明 (1993) シノリガモ. pp. 36–37. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
7. 細谷賢明 (1993) ピンズイ. pp. 56–57. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
8. 細谷賢明 (1993) ゴジュウカラ. pp. 68–69. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
9. 細谷賢明 (2002) オシドリ. p. 43. In: レッドデータブックとっとり (動物).
10. 一澤 圭 (2012) クロサギ. p. 38. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
11. 一澤 圭 (2012) ピンズイ. p. 56. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
12. 一澤 圭 (2012) セッカ. p. 59. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
13. 一澤 圭 (2012) ゴジュウカラ. p. 60. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
14. 一澤 圭 (2012) ホシガラス. p. 61. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
15. 井上貴央 (1986) 目久美遺跡より検出された動物依存体について. pp. 129–138. In: 加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書. 米子市教育委員会
16. 井上貴央 (2012) コウノトリ. p. 39. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
17. 神谷 要・土居克夫 (1998) 中海・宍道湖周辺で行ったマガン日没前後の観察結果. ホシザキグリーン財団研究報, 2: 275–281.
18. 神谷 要・森 茂晃 (2000) 宍道湖において罫をとるマガンの調査報告, 4: 95–104.
19. 金井 裕 (2014) サンショウクイ. pp. 210–211. In: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編) レッドデータブック 2014 . 2. 鳥類. 日本の絶滅のおそれのある野生生物. ぎょうせい (東京), 250 pp.
20. 環境省自然保護局野生生物課 (編) (2012) 猛禽類保護の進め方 (改訂版) —特にイヌワシ, クマタカ, オオタカについて—. 86 pp.
21. 環境省生物多様性センター (2021) 2020 年度モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査 2020/21 年調査報告書.
22. 片岡智徳 (2002) クロサギ. p. 38. In: レッドデータブックとっとり (動物).
23. 片岡智徳 (2002) ノスリ. p. 50. In: レッドデータブックとっとり (動物).
24. 片岡智徳 (2002) セッカ. p. 73. In: レッドデータブックとっとり (動物).
25. 片岡智徳 (2002) ゴジュウカラ. p. 74. In: レッドデータブックとっとり (動物).
26. 桐原佳介 (2012) チュウサギ. p. 38. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
27. 桐原佳介 (2012) クロツラヘラサギ. p. 39. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
28. 桐原佳介 (2012) コハクチョウ. p. 41. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
29. 桐原佳介 (2012) ヨシガモ. p. 42. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
30. 桐原佳介 (2012) オジロワシ. p. 44. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
31. 桐原佳介 (2012) クイナ. p. 49. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
32. 桐原佳介 (2012) タマシギ. p. 49. In: レッドデータブックとっとり改訂版.



33. 桐原佳介(2012)トラフズク. p. 52. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
34. 桐原佳介(2012)コシアカツバメ. p. 55. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
35. 小林一彦(1993)カヤクグリ. pp. 58-59. In: 鳥取のすぐれた自然(動物).
36. 小林一彦(1993)コルリ. pp. 60-61. In: 鳥取のすぐれた自然(動物).
37. 小林一彦(1993)マミジロ. pp. 62-63. In: 鳥取のすぐれた自然(動物).
38. 小林一彦(1993)クロジ. pp. 70-71. In: 鳥取のすぐれた自然(動物).
39. 小林一彦(2002)コノハズク. p. 60. In: レッドデータブックとっとり(動物).
40. 小林一彦(2002)ビンズイ. pp. 65-66. In: レッドデータブックとっとり(動物).
41. 小林一彦(2002)エゾムシクイ. p. 72. In: レッドデータブックとっとり(動物).
42. 小林一彦(2002)ホシガラス. p. 77. In: レッドデータブックとっとり(動物).
43. 国土交通省河川環境データベース <http://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/>
44. 國本洸紀(2002)サンショウクイ. p. 66. In: レッドデータブックとっとり(動物).
45. 國本洸紀(2012)サンショウクイ. p. 56. In: レッドデータブック改訂版.
46. 國本洸紀(2012)ベニヒワ. p. 61. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
47. 増田裕子(2002)ワシカモメ. p.57. In: レッドデータブックとっとり(動物).
48. 森本 栄・飯田知彦(1992)クマタカの生態と保護について. *Strix*, 11: 59-90.
49. 中前雄一郎(2017)東郷池周辺お散歩ガイド 自然編 野鳥の部. 東郷湖・天神川サケの飼育放流プロジェクト, 23 pp.
50. 公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団(監修)(2015)米子水鳥公園の生態系と野鳥図鑑. 今井印刷(米子市). 232 pp.
51. 公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団(2016)平成27年度米子水鳥公園事業報告書. 172 pp.
52. 公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団(2016)平成26年度米子水鳥公園事業報告書. 178 pp.
53. 公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団(2018)平成29年度米子水鳥公園事業報告書. 146 pp.
54. 公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団(2020)平成31年度米子水鳥公園事業報告書. 160 pp.
55. 公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団(2021)令和2年度米子水鳥公園事業報告書. 162 pp.
56. 日本鳥学会(2012)日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 438 pp.
57. 日本イヌワシ研究会. 生息, 繁殖状況調査委員会, 保護対策委員会(2015)イヌワシの生息状況…つがい数の減少と繁殖成功率低下の33年間の推移(記者発表資料). 6 pp.
58. 日本野鳥の会鳥取県支部(1992)銀杏羽, No. 2. 12 pp.
59. 日本野鳥の会鳥取県支部(1997)鳥取県のオシドリ, 県下の生息状況調査報告. 日本野鳥の会鳥取県支部, 97 pp.
60. 日本野鳥の会鳥取県支部(2003)銀杏羽, No. 66. 20 pp.
61. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2012)銀杏羽, No. 121. 20 pp.
62. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2013)銀杏羽, No. 126. 16 pp.
63. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(編)(2014)鳥取県鳥類目録. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部, 59 pp.
64. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2014)銀杏羽, No. 131. 16 pp.
65. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2014)銀杏羽, No. 132. 16 pp.
66. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2015)銀杏羽, No. 137. 16 pp.
67. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2015)銀杏羽, No. 138. 16 pp.
68. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2015)銀杏羽, No. 139. 16 pp.
69. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2015)銀杏羽, No. 140. 24 pp.
70. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2015)銀杏羽, No. 142. 16 pp.
71. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2016)銀杏羽, No. 143. 16 pp.
72. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2016)銀杏羽, No. 144. 16 pp.
73. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2017)銀杏羽, No. 150. 12 pp.
74. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2017)銀杏羽, No. 151. 20 pp.
75. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2017)銀杏羽, No. 154. 16 pp.
76. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2018)銀杏羽, No. 156, 16 pp.
77. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2018)銀杏羽, No. 157. 16 pp.
78. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2019)銀杏羽, No. 161. 20 pp.
79. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2019)銀杏羽, No. 163. 16 pp.
80. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2019)銀杏羽, No. 164. 24 pp.
81. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2020)銀杏羽, No. 167. 20 pp.
82. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2020)銀杏羽, No. 168, 20 pp.
83. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2020)銀杏羽, No. 169. 16 pp.
84. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2020)銀杏羽, No. 170. 24 pp.
85. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2020)銀杏羽, No. 171. 16 pp.
86. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2021)銀杏羽, No. 173. 24 pp.
87. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2021)銀杏羽, No. 176, 28 pp.
88. NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部(2021)銀杏羽,

No. 177, 16 pp.

89. 新妻靖章 (2014) ヒメウ. p. 82. In: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編) レッドデータブック2014. 2. 鳥類. 日本の絶滅のおそれのある野生生物. 株式会社ぎょうせい (東京), 250 pp.
90. 岡垣大志 (2012) ノスリ. p. 46. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
91. 佐原雄二 (2013) ヨシゴイ. Bird Reseratch News, 1: 4-5.
92. 齋藤武馬 (2011) メボソムシクイ. バードリサーチニュース, 8(11): 2-3.
93. 佐藤仁志・森 茂晃・八幡浩二 (2012) 隠岐諸島におけるカンムリウミスズメ *Symthliboramphus wumizusume* の生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告, 15: 299-306.
94. 重田芳夫 (1974) 東中国山地のイヌワシ. pp. 106-140. In: 氷ノ山・後山・那岐山国定公園三県協議会 (編) 東中国山地自然環境調査報告. 兵庫県・岡山県・鳥取県, 310 pp.
95. 塩村 功 (1983) 鳥取のイヌワシ. *Apuila chrysaetos* (日本イヌワシ研究会機関紙), pp. 20-25
96. 塩村 功 (1987) 鳥取県におけるイヌワシ生息の現況と2, 3の生態観察. *Apuila chrysaetos* (日本イヌワシ研究会機関紙), 5.
97. 田村昭夫 (2002) シロカモメ. P. 57. In: レッドデータブックとっとり (動物).
98. 鳥取県農林水産部森林保全課 (編) (2003) 第57回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌 ととりの野鳥. 鳥取県農林水産部自然保護課, 137 pp.
99. 鶴崎展巨 (編) (2016) 鳥取県猛禽類生息調査(2015年度) 報告書. 鳥取大学地域学部, 28 pp. + 196 pp.
100. 植田睦之・植村慎吾 (編) (2021) 自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告書 日本の鳥の今を描こう 2016-2021. 鳥類繁殖分布調査会, 176 pp.
101. Wetland International(2020) "Waterbird Population Estimates". Retrieved from [wpe.wetlands.org](http://wpe.wetlands.org) on Thursday 30 Nov 2021.
102. 安田亘之 (1993) ミサゴ. pp. 38-39. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
103. 安田宣之 (1993) クマタカ. pp. 44-45. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
104. 安田亘之 (1993) ホシガラス. pp. 72-73. In: 鳥取県のすぐれた自然 (動物).
105. 吉田 亮 (2012) トモエガモ. p. 42. In: レッドデータブックとっとり改訂版.
106. 吉田 亮 (2012) ミコアイサ. p. 43. In: レッドデータブックとっとり改訂版.